cyber girl ～REIKA～

No.318

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｃｙｂｅｒ　ｇｉｒｌ　～ＲＥＩＫＡ～

【Ｎコード】
Ｎ４５２４Ｏ

【作者名】
Ｎｏ．３１８

【あらすじ】
はるか昔かも知れない
近い未来かもしれない
ただ言えるのは一つ
いつかこの瞬間はくる

～01～（前書き）

パンクしそうな脳で頑張って書いていきます。
とりあえずの殴り書き状態なので展開が早いと感じたり、文章がおかしいかもしれません。
ＳＦの知識も無いので突っ込みたい気持ちは分かりますが難しく考えないで気楽に読んで頂ければ幸いです。
完結が程遠いですが頑張ろうと思います。
小心者ですが、ご指摘ご感想ありましたら宜しくお願いします。

～01～

２１世紀中頃。

人類の限界にまで挑んだ新たな最先端科学が幕を開けようとしていた。

「ようやく完成ですね」

「人間の技術もここまで来ましたか。素晴らしい」

一面無機質素材で出来た研究室の一角で白衣を着た男とスーツ姿の男２人がそれを前に話をしている。

白衣の男による解説が始まった。

「この者の目的は主にボディーガードです。これまでに大統領暗殺事件など起きていた事もあり、
人間につくボディーガードが人間では結局は被害者が出てしまいます。
そこで不死身の人造人間をという案が出たのです。強力なボディーは弾丸をも貫かない。
防御率も１２０％で、場合によっては正当防衛も・・・」

「構わんであろう！国を守ると言うことにも匹敵することだ」

「内蔵されたプログラムのデータはすべて先日打ち上げたＡ－Ｄ２Ｘ衛星で管理しています」

そう言うと白衣の男はデスクに向かい、そこにある厳重に何かを保管してあるであろうケースのロックを解除し始めた。

開くとそこには一枚のカードチップがあり、手にとって見せた。

「こちらのキャッチカードを持っていただくことにより、位置確認から周囲の状況、危険度までコイツが受信し対応するシステムです」

「つまり、カードを拠点とした防衛データをこのボディーガードが受信して動いてくれると言う訳か」

「はい」

「もはや怖いものはありませんな」

「うむ。よく研究をしてくれた。おめでとう」

「ありがとうございます」

研究の成功に笑みを交わし硬い握手が結ばれた。

白衣の男の名は田神スン科学博士。

しかし、その頃宇宙空間には異変が起こり始めていた・・・

計算し尽くして打ち上げられている数々の衛星。

だが、長年打ち上げられ続け、スペース・デブリ（宇宙ゴミ）となった残骸がいくつもの偶然で無数に浮かぶ衛星に次々に直撃した。

その欠片がＡ－Ｄ２Ｘ衛星を掠めると、無常にも衛星はあっさりと大破し闇の藻屑となってしまう。

完成発表からわずか数時間後の出来事だった。

研究員が管理システムにより、衛星の異変に気づく。

「こ・・・これは！！！なんてことだ！！」

これまでにもロケット打ち上げ失敗や、衛星の作動ミスなどは沢山あった。

人間の手で作るものには狂いも生じる。

しかし、その積み重ねでようやく成功した大プロジェクトに異変が起こってしまうのは一大事である。

誤報であることを信じ、彼はもう一度確認を取り始めた。

「大変だ！！」

その時他の研究員の叫び声が飛び込んで来る。

完成品を監視していた同僚が息を切らしながら駆けつけてきたのだ。

「Ａ－Ｄ２Ｘがいない！！」

やはり誤報ではなかった。

トラブル発生に研究員らは焦りを隠せなかった。

「至急リーダーに報こっ・・・・・・・・!!?」

研究員の声が止まった。

～02～

翌朝。

食卓を囲むある家族の中で父親が新聞を広げている。

この情景はいつの時代も変わらないものであった。

２１世紀も１０数年が過ぎた頃には紙媒体がなくなり、小型の電子画面をタッチすれば記事が浮かび上がる「ｎｅｗｓ　ｓｃｒｅｅｎ」というものが主流になった。

定額料を支払うことで毎日ニュース記事が配信されてくるのである。

「お！『ＴＡＧＡＭＩｓｃｉｅｎｃｅついに完成！ボディーガード型アンドロイド』か～、すごい世の中になったもんだなぁ」

画面をタッチしページをめくった父親が思わず声に出した。

「何をボディーガードするの？」

彼の右手に座り朝食を共にしていた少女が興味を抱く。

「そりゃ、国のお偉いさん達だろうなぁ」

「ふーん。けどその守ってもらう側が悪党だったら最悪ね」

「ははは、恐ろしいことを言うな麗加は」

「狙われるようなことをしなければいいのよ」

毅然と言い放ち、甘い香りのアップルティーの入ったカップに口をつけた彼女の名は暮内麗加（くれないれいか）。

高校二年生。

１６０センチない背丈に少し細身の体型で、姿勢良く座っている。

サイドが長めの前下がりボブスタイルの髪は真っ直ぐに伸び、差し込む日差しに時折ブラウンに輝く。

制服は真面目を保ちそれが彼女の性格を物語っていた。

「麗加！グズグズしてると遅れるわよ」

「はーい！」

キッチンのカウンターから顔を覗かせ知らせたのは彼女の母親だ。

最後にもう一度アップルティーに口をつけ席を立った。

「おねーちゃん、いってらっしゃい！」

部屋を出るときに食卓から元気な少年の声が飛んできた。

手を振ってニコニコしているのは１０歳年の離れた弟、麗雄（れお）だ。

「いってきます！」

麗加は笑顔を返した。

「今日、ママたち昼前におじさんのとこに向かうから学校終わったら直行で来てね」

「うん、分かった。いってきます！」

笑顔の見送りだった。

玄関を開けると激しい機械音が響きわたっていた。

車道は通勤する人々のモーターカーで混雑をしている。

上空には鳥のような翼をもつ銀色の小型の機体が飛び交う。

麗加は見慣れたいつもの風景の中を歩き進んだ。

明日は麗加の住む街から2つ隣の街に住んでいた叔父の三回忌。

そのため麗加家族は前日から叔父の家に行くことになっていた。

真面目な麗加は学校を休まず出席し、後から合流する形をとった。

麗加は生前の叔父をとても尊敬した。

きっとその訳を言うと怒られてしまうだろうから秘密にしているが、

麗加は叔父が大好きだった。

～03～

「おはよーーーー！！！」

目的地に向かっていると上空彼方から威勢のいい声が届いた。

麗加が振り向き見上げると同じ制服を着た女子高生2人が上空から降りてきた。

親友の千風（ちかぜ）と美兎（みう）だ。

「おはよ」

「麗加いつも歩きでタルくなーい？」

自身の方がタルそうに若者らしい口調で発するのは千風。

170センチ近い長身でスタイルも良く、ファッションセンスも持ち合わせており、少し着崩した制服にモチーフの大きなアクセを身につけている。

小麦色の肌にミディアムの長さの黒髪ストレートで、そのヘアースタイルは左サイドにコーンロウが入っていて、ピンクとグリーンのエクステでアレンジが効いていた。

「麗加もこれ乗ればいいのにー」

そう言って乗っていたマシーンを指差したのは美兎だ。

千風とは逆に１５０センチそこそこの身長と小柄で、肌の色も白く明るめのオレンジの髪は内巻きにかけられたカールが決まっている。お花のモチーフを好み今日もお気に入りのネックレスとピアスをしてる可愛らしい女の子である。

二人が乗っていたのは”ｓｋｙ　ｄｒｉｖｅ”通称”ＳＤ”と言う一人用の乗り物である。

学校指定のＳＤがあり、許可証を貼り付ければ誰でもＳＤ通学が可能だ。

座席に座り、飛び出たハンドルを握ることで操作をすることが出来、２０世紀に発明され地上を走っていたスクーターとボディー形状は似ている。

ただタイヤはなく代わりに３０センチ程の翼が前面両サイドにあり、走行を安定させるのだ。

原動力は磁気によるもので、地上に張られた磁気道路の上を走ることが出来、地上を走るモーターカーも同じ原理である。

ＳＤは道路交通法で定められた地上からある程度の高さと地上での走行が可能で、高度についてはマシーンによる操作で切り替え行う。

これも開発はあのＴＡＧＡＭＩｓｃｉｅｎｃｅだ。

「私はいいよ。歩いていけない距離じゃないしね」

「麗加ってほんと機械嫌うよね～」

二人はＳＤの速度を麗加の歩調に合わせ並んだ。

「まぁ、最低限の利用かな・・・でなきゃやってけないしね」

麗加はやれやれといった表情で言葉にする。

「でもさ、機械ばっかに囲まれてちょっとウンザリなのも分かるかも」

「あー、昨日やった『自然環境学』でしょ！昔は自然緑豊かで酸素も自然に循環してたってね」

「あんなところで吸う酸素は味が違うのかなぁ～。こんな機械都市じゃ想像もつかないけどね」

「あの頃の人類がこの時代見たらどう思うんだろうね」

「ぶったまげるっしょ！！」

話に盛り上がっていると3人は学校の門をくぐっていた。

～04～

ポーン・・ポーン・・

聞きなれた電子音が鳴り響くと授業が始まる。

「では、今日は人間の臓器について詳しくやっていきます。皆ページの３６を開いて」

先生の指示を受け、生徒達は各自所有する小型ノートパソコンを操作する。

教科書など既に存在はしない。

それさえも歴史として授業に出るくらいだ。

今は各教科ごとに一冊ずつ持たなくてもこの小型ノートパソコン一つでいい。

手書きもないため鉛筆や消しゴムなどもコレクターが趣味で持つくらいで日常に使うことは殆どなくなった。

「あ、その前に、皆は人工臓器って考えたことがある？」

先生は生徒たちに目を向けた。

「今は重い病気にかかっても人工・・・つまり機械で出来た臓器と取り替えることによって病死を免れるケースが多くなってきてるけど皆はこれについてどう思うのかな？」

先生はそう問いかけると目が合った生徒を指名した。

「あ、え・・と。ありがたいことなんだと思います」

「ありがたいことね」

「なんていうのかな・・昔はこんなの有り得なかったわけで、それが今では実現されてるから、それって長い時間かけて人が試行錯誤重ねて可能にしてきた。

だけど、それってその分失敗や犠牲はあったと思う。でもそのおかげで今があるから」

「うん、素晴らしい意見ね。それじゃもう一人・・・暮内さんどう？」

「え、はい。」

大体授業中に指名されると生徒は緊張するものだ。

「私は・・・・」

麗加は少し自信がなさそうにうつむいたが思い切ったように発言した。

「自分には必要ないと思っています」

生徒たちが一斉に麗加を注目した。

先生も予想しない発言に興味を示した。

「それはどうして？」

麗加は自分の考えを話し始めた。

「私の叔父は2年前に肺癌で亡くなりました。人工臓器を導入してれば今でも健在だったと思います。

けど叔父は自分の体に機械を入れるのを嫌いました。最後まで『自分』でいたかったんだと思います。

それは自分の運命を変えてしまうことな気もします。

確かに死というのは悲しくて辛くて怖いことなので免れたいとは思うけど、私はそんな叔父を尊敬しています。」

異色な発言にクラス中が静まり、クラスメイトは何らかの興味を示してくる。

「なるほどね、ありがとう」

先生に言われると麗加は席についた。

正直な気持ちだったが、内心では不安な気持ちで一杯になっていた。

最先端医療を否定するなんて確かにおかしいことである。

しかしそんな発言を先生が思わぬ流れに持っていくのだった。

「今の時代大体のことは科学や医学の力で何とかなるけど、人はそれに頼りすぎているのかもしれない。

人工臓器の導入にもそれなりの条件はあるけど、それよりもそうならないことが大事なのよね。

風邪を引かないように、腹痛を起こさないように・・・それでもどうにもならない病にかかってしまう。
その時は頼ってもいい。生きたくても生きられなかった時代が生きられる時代になった。
だけど、その原点初心を忘れてはいけない。それを叔父さんは伝えたかったのかもしれないね。」

そんな先生のフォローに麗加の不安はなくなり、他の生徒も納得の色を見せた。

「話が反れたわね、では内容に戻ります」

～05～

―放課後―

「じゃ、私ロッカー寄って帰るね」

「うん、またね～」

授業が終わり麗加は千風と美兎と別れ、帰り支度をしに廊下にあるクラスごとに設置されたロッカーへ向かう。

そこにいた一人の男子生徒の姿を見つけると麗加の足が止まった。

「あ・・・」

麗加の胸がドキッと大きく鼓動した・・・

男子生徒は麗加に気がついた。

「よう」

「ども・・・」

そう言って声をかけてくれたのは同じクラスの邦鷹勇也（ほうだかゆうや）だ。

勇也は普段は特に目立つタイプではなく、クールな性格もあって少し落ち着いている。

他の生徒のように制服を着崩したり、着飾ったりもせず普通の背格

好だがダサいイメージはなくそれが良く似合っている。
青みがかった髪は短く、逆立てる前髪がスポーツマンらしさを匂わせた。
勇也は部活動のための準備をしていたのだ。
そんな憧れを目の前に緊張しながらロッカーから荷物を取り帰り支度をする。
沈黙の中・・・
「さっきの話さ・・・」
勇也が麗加に話し掛ける。
話し掛けられるなんて思ってもいない麗加は緊張が更に増した。
「は・・はい？」
麗加は『生意気だと思われたんではないか』と不安を隠せなくなった。
どうしよう・・・そう思うと手が震えた。
しかし次に勇也が発した一言に麗加は救われることとなる。
「俺もかっこいいと思うよ」
「え・・・？」

「その叔父さん。なんつか、英雄・・・みたいじゃん」

そこには優しく微笑みかける勇也の姿があった。

「あ、ありがとう。そう言ってもらえて嬉しい・・・あんなこと言っちゃって内心不安だったから」

麗加は思わず安堵の表情をみせた。

勇也はそんな麗加の表情を見ると一言言った。

「そこが暮内の良いとこなんじゃない？」

麗加は嬉しさで一杯になった。

今にもうれし泣きしてしまいそうな勢いだった。

「それじゃ、俺部活だからまたな」

「うん・・・頑張ってね」

「おう！」

勇也は笑顔で返し走り去っていった。

夢のようなひと時に麗加はカバンを抱きしめ、赤面しながら嬉しさを隠せずにいた。

麗加はその足で駅へ向かい、家族が先に待つ叔父のいた街、イエロ

ータウン行きのモータートレインに乗車した。

この街ブルータウンからモータートレインで約15分程で着く。

麗加が窓際の席に座るとトレインは発車した。

風景を眺めながら勇也との出来事を思い出していた。

サッカー部所属の、麗加が密かに憧れる存在である勇也はチームのエースだ。

普段のクールな姿とは一変し、サッカーをするときには迫力と情熱の顔を見せる。

そのときの勇也はとても輝いて見えた。

その姿が麗加を虜にするのだった。

～06～

そんなことを思っているとトレインは一つ目の駅、レッドタウンへ到着した。

数秒の停車の後発車ベルを鳴らしてトレインは再び発車した。

目的の街が見えてくる。

と、

その時ものすごい爆音と振動とともにトレインは急停車した。

突然の事態に乗車客は驚いた。急停車による負傷者もいた。

「なんだ・・・何が起こったんだ!?」

乗客が混乱し始める。

「おい、見ろよ!どうなってんだ!?」

一人が指差す方を見ると信じられない光景が麗加の目に飛び込んできた。

「何・・・?これ・・・」

街が真っ赤に染まっている。
人々はショックで言葉を失っていた。
目の前で起こっていることが理解できずにただその情景を唖然と見ているだけだった。
『お客様に申し上げます。ただ今イエロータウン内にて原因不明の爆発が起きた模様で緊急停車いたしました。
大変緊急事態で危険ですのでどうかそのまま車内でお待ちください』
アナウンスが入った。
恐怖で泣き出す者、慌てる者、車内は騒然としだしていた。
またしばらくするとアナウンスが入った。
『お客様に申し上げます。この先は大変危険な状況のため、運転を中止させていただきます。
安全な場所まで移動いたしますので、その後係員の指示に従い避難してください。』
トレインはゆっくりと後退し始めた。
数十メートル程移動したところで、扉が開き、駆けつけた係員や消防、警察の誘導で乗客が非難を始めた。
既に何台かのヘリやＳＤで機動隊などが街に駆けつけているため、上空に激しい音が鳴り響いていた。

呆然としていた麗加もハッとし、逃げ惑う人を掻き分け炎に包まれた街のほうへと足を向けた。

「パパ、ママ・・・麗雄！！！」

無我夢中で走り出す。

しかし何百メートルと離れた所からでも既に近づけないほどの炎に包まれてしまっていた。

こんなことがあり得るのか・・・。

周りでは慌しくレスキュー隊や警察が動いている。

一人の隊員に麗加は安全な場所に行くよう指示をされたが耳にはいらない。

レスキュー隊ですら現場に近づけない。

こんな状況の中人が無事でいる可能性は殆どないだろう。

だがそんなことは今の麗加には理解できないし、思いたくもないことだ。

ハッとした麗加は少しの可能性に賭け、携帯電話から自宅に電話をしてみた。

しかし、予定通りに家族はこの街に向かい家は留守だった。

やっぱり家族はこの中にいる。

「パパ！！ママ！！麗雄ーーーーーー！！！」

力一杯に叫んだ。

街を包む炎はそれをあざ笑うかのように更に激しさを増した。

ふとその炎の中から黒い影が見えた。

「何・・・？誰かいる！！？」

気づいた瞬間、その影の方から麗加に向かって強い光と衝撃が向かってくる。

ドシュッッ！！！

「！？・・・きゃぁあああぁぁあぁ！！！」

私・・・どうなったの？

死んだのかな・・・。

皆は・・・どこ？？

ここは・・・どこ？？

～07～

ん・・・・ま・・ぶし・・・い・・・・・ここは・・？

何日かして麗加はベッドの上で目を覚ました。

その時白衣の男が病室に入ってきた。

「気がついた？」

男はほっとした様子で声をかけてきた。

サラサラとした清潔感ある髪を中心から少し左で分けており、細いシルバーフレームの眼鏡が知的な印象を与えた。

「ここは病院だよ。僕は院長の仁（じん）です。」

「あの・・・私」

状況が把握できず可能な範囲を見渡した。

「覚えてる？君は１０日前のイエロータウンで起きた爆発の被害にあい奇跡的に助かったんだよ。」

麗加はハッとし起き上がった。

「ねぇ！！パパは！？マ・・・っつ！！」

飛び起きた麗加の体に激痛が走った。

仁は支えゆっくりベッドに寝かせた。

運び込まれた時の麗加の体は、爆風で飛んだであろう破片の擦り傷が無数にあり、打ち身も酷い状態だった。

安静にしていなければならない。

そして麗加の様子から当時家族もイエロータウンにいたのだろうと察し、仁は首を横に振った。

「・・・麗雄は？」

「残念だけど、あの時イエロータウンは全壊してしまって、生存者は殆どいないと発表がされてる。
君が助かったのも奇跡だったんだ。」

皆死んだ・・・？

「う・・嘘」

ショックで言葉が出なくなる。

頭は真っ白になり、体中の血の気が引いていくのが分かった。

次第に手が震え始め、溢れ出した涙が止まらなくなり、麗加は顔を覆って泣き喚いた。

「あぁ・・・・うぅぁ！！！！！！」

信じられないよ・・・

なんで！？

トレインに乗るまでは想像もしなかった事だった。

どうしてこんな事になってしまったんだろうか。

これが麗加の運命の始まりだった。

～08～

あれから1ヶ月。

麗加は人が変わったように呆然と空を見上げるばかりだった。

本当は何もかもが嘘だったような気さえしていた。

イエロータウンに行くのも、街が爆発した瞬間も、すべてが夢だったような。

いや・・・夢であってほしい。

「暮内さん食事の時間ですよ」

看護婦が麗加に食事を運ぶ。

しかし麗加は言葉にならない返事を返すだけで、目線は空に向けたままだった。

「・・・、少しでも良いから、食べてね」

看護婦は麗加を心配に思いながら部屋を後にした。

鬱状態にあった麗加はしばらく食事も喉を通らなかった。

治療は受けているものの心の傷は深かった。

こんな日が何日も続いた。

家族を失った麗加のショックは相当なものだったのだろう。
生きる希望さえ失ったようにも感じる。
まだ痛々しい傷跡も残るが、命が助かったのは本当に奇跡だった。
今では自分で歩くことも出来るようになった。

しばらく様子を見た後、仁は少し時間をとり、こっそり麗加を学校の前まで連れて行くことにした。
「君は決して一人ではないはずだよ。早く元気になって友達とも会いたいだろう？」
少し遠くに車を止め、学校を眺めた。
麗加の表情に少し変化が見られた。
丁度部活に励む勇也の姿が目に入ったのだった。
仁は更にと、小型のノートパソコンを麗加に渡し、メールの一覧を見せた。
「君がうちに入院してると聞いてクラス中からメールが来たんだよ」
麗加は一つ一つに目を通した。

『元気になったら学校においで』

『無事でよかった』

『また一緒に授業を受けられる日を待っている』

などどれも暖かいものだった。

親友の千風と美兎からのメールもある。

『麗加が無事でホント良かった！！残念なこともあって辛いだろうけど、麗加には私らがいるよ！
すぐには無理かもしれないけど少しずつ元気を取り戻して・・・。
元気でたら連絡してね！そしたら私たち会いに行くから』

麗加が元気になって会いたいと思うまで待っている。

二人の精一杯の友情が込められていた。

勇也からもメールが来ていた。

『今は辛いだろうけど、無理はしなくて良い。
だけど、君は一人ではない。
また元気な姿で会える日を楽しみにしてるよ』

麗加の目に涙が溢れた。

悲しみの涙ではない。

嬉しい涙だった。

何より勇也からの言葉が嬉しかった。

「先生・・・ありがとう」

麗加は仁に礼を言うと、メールをじっと見つめていた。

安心した仁は微笑み車を発進させた。

それから麗加は少しずつ前向きになり、回復していった。

怪我の傷も大分消え、麗加は学校に行きたいと思い始めていた。

「暮内さん、そろそろ自分で外に出てみる気はない？」

「え？」

「外出許可。出してあげるよ」

「本当！？私、学校に行きたい！皆に会いたい！！」

麗加がはじめて笑みを見せた。

～09～

―数日後―

「じゃぁ、2時間後に迎えに来るから、楽しんでおいで」

「ありがとう先生！いってきます」

仁に送ってもらった麗加は、放課後の学校に姿を現した。

校門をくぐると、千風と美兎が待っていた。

「麗加！！！！！！」

「千風！！美兎！！」

三人は久々の再会を喜んだ。

「二人とも会いたかったぁ！！！」

そう言うと、千風から麗加はおでこをピン！と弾かれた。

「ホントはもっと会いたかった人いるんでしょ～～～～！！！」

「え・・・」

そう言うと、二人に引っ張られ、部活中のグランドの見渡せる校庭へと連れて行かれた。

遠目だがそこには部活に励む勇也の姿があった。

頬を少しピンクに染め、嬉しそうに見つめる麗加を見て、二人は安堵の胸をなでおろした。

「麗加、元気そうで良かったよ・・・傷も残らなくて・・・その・・・さ」

「うん・・・ありがとう。ごめんね心配かけて・・・」

「ま、まぁまぁまぁまぁ！！！今日は久しぶりなんだし！！ゆっくり拝んでいきなよっ！！」

「拝むって・・・」

三人は無邪気に笑った。

楽しい時間はあっと言う間に過ぎ、仁の迎えに来る時間が近づいた。

「私そろそろ行かなきゃ・・・迎えの時間」

「うん、また許可でたら今度は街に買い物でも行こうよ！うちらも遊びに行くからさ！！」

「ありがとう！またね！！」

「うんうん、またメールすんね～～！！」

麗加は二人と別れた。

待ち合わせの門の前に向かい、仁の迎えを待った。

～10～

その時、麗加の背後に何かが忍び寄っていた。

麗加は何者かに突然口を塞がれた。

「大人しくしろ。暴れたら殺す」

見知らぬ男3人に麗加は近くの空き家に連れ込まれてしまった。

校舎に戻る途中千風はふと思い出すように足を止めた。

「あ、そういえば、最近学校の周り変な集団がいるから気をつけろって先生言ってたけど、麗加大丈夫だったかな・・・」

「すぐに迎えが来るなら心配ないと思うけど、一応見に行ってみようか」

二人は麗加のいるハズの校門前に行った。

そこには麗加の姿はなかった。

「あ、もう迎え来たんだね、なら大丈夫か」

二人は学校に戻ってしまった。

「いやっ・・何！！？」

「大人しくしろっつってんだろ！！！大人しくしてれば命は助けて

やるぜ」

「おい！押さえつけろ！」

「やっ！！」

たすけて！！！！

麗加は心の底で助けを叫んだ。

必死に抵抗する麗加を押さえつけ、一人の男が服を破った。

「いやぁーーーー！！！！！！」

その時、麗加に異変が起こった。

叫びと同時に、男を弾きとばした。

「って！！！この女ぁ！！！！」

「来るなぁーーーー！！！！！！」

すると麗加は発光と共に爆風のようなものを起こし、男たちを弾き飛ばしていた。

「なんなんだこの女・・・」

「やべーよコイツ・・・行こうぜ」

男たちは麗加を只者だとは思わず、その場から去っていった。

麗加はその場で震えだし、しゃがみこんだ。

『やべーよコイツ』

恐怖心を覚える中、麗加の脳裏にその言葉だけが残った。

その時仁からの着信で携帯電話が鳴った。

「暮内さん？迎えに来たけど・・・？」

「先・・生・・・」

麗加は泣き出し、今いる場所を告げた。

震えてしゃがみこむ麗加の元に、仁がやってきた。

「暮内さん！！どうかしたのか！！？」

仁は麗加が破られた胸元の服を握り締めているのに気がついた。

「大丈夫！！？何かされたのか！！！？」

仁は麗加の身に起きたことを察し、医師としての質問をした。

麗加は、首を横に何度も振った。

仁は少し安心した。

「もう大丈夫だ。タイミングが合わなかったようですまなかった。

無事でよかった。すまない。」

「怖かった・・・」

麗加は仁と共に病院へ戻った。

麗加は鎮静剤を打たれ、眠りについた。

突然、力では敵わない男3人に襲われた恐怖心は大きかった。

しかし、麗加が本当に怖かったのはあの時の自分の力のほうだった。

一瞬、自分ではない何かが現れた気がした。

～11～

翌日、目が覚めた麗加は落ち着きを取り戻していた。

麗加は仁の元へ行き、自分の身に起きたことを話すことにした。

「先生、ちょっと時間いい？？聞いてほしいことがあるんだけど・・・」

「昨日のこと・・かな？？話せる？」

麗加は仁の前の椅子に座った。

「私、強姦されかけたんだよね・・・？だけど、無事だった・・・の」

「うん」

状況を思い出し落ち着いて話を進める。

「男3人に押さえつけられて、とても敵わなかった。だけど、服を破られて、必死に抵抗しようとした時に、

なんか、体の底から凄いパワーみたいなものがこみ上げてきて、気がついたら男3人弾き飛ばしてたの。

いくら窮地に立たされてても、こんなことってありえるのかな・・・」

「人には「火事場の馬鹿力」といって、いざとなると計り知れない力を発揮できる能力を持っているといわれるけど、

そうとは言えないってことなのかな。何かそれでは考えられないような変化を感じたとか・・・」

「私自身の力だったとは思えなかったの。爆風みたいなもので、一気に弾き飛ばしてたような・・・

男たちに『やべーよコイツ』って言われて、自分自身のほうが怖くなったの。なんか、身の危険を感じると何かで守るような・・・

そんな力があるような気がする。そういえば、あの時も私とっさに何かで自分を守ってたような気がする」

「イエロータウンの爆発に巻き込まれたときかい？」

麗加は以前からその事が少し引っかかっていた。

自分は爆発の被害にあった被害者としてこの病院に搬送されていたのだが、麗加は爆発に直接関わってはいないのだ。

「それなんだけど・・・私爆発が起きた時はまだイエロータウンにはいなかったの」

そう告げると仁は表情を変えた。

「え・・・じゃぁ君が被害にあったのは・・・？」

「あの時は、モータトレインで向かう途中で爆発が起きて、私は必死に街に向かったんだけど、もう近づけなくて・・・

そしたら、炎の中から何か、人影みたいなものが見えて・・・それでその先から何か強い光と爆風が向かってきたの。

あれもなんだったんだろう・・・」

「イエロータウン、人影・・・」

「先生・・・？」

何気なく爆発事故の真相を話すと、仁の顔色が変わっていた。

「先生？どうかしたの？」

「あ、いやすまない」

難しい顔をして黙り込んでしまった仁が我に返る。

「私、何かおかしいのかな・・・自分が怖いの」

「そんなに気になるようだったら、今度詳しい検査をしてみようか。何か分るかもしれない」

「うん・・・」

麗加は自分の病室に戻った。

ふと、さっきの仁の様子が気になった。

あの街と人影のようなもの・・・何か関係があるんだろうか・・・。

今、世の中で何が起こっているんだろうか・・・。

～12～

夜も更け、街が寝静まった頃、謎の爆発の起きたイエロータウンの隣町レッドタウンに突如、同じ謎の爆発が襲った。

その爆発は、イエロータウンほどではなかったが、ある場所を中心に広範囲に渡っていた。

巻き込まれた負傷者が多く、少し離れたこの街ブルータウンの仁の病院にも次々と搬送されてきた。

緊急事態に医師たちはあわただしく動いていた。

「仁先生！！こちらの方が重症のようです！お願いします！！！」

そういって運び込まれた一人の男性を見た仁は驚きを隠せなかった。

それは、数年もの間絶縁状態だった家族の一人、弟の賢（けん）だった。

「賢！！賢じゃないのか！！しっかりしろ！！！聞こえるか！！？」

「はっ・・・は・・に・・さん・・・・・ごめ・・」

「とにかく話は後だ！！今は何も話すな！！すぐに助けてやるから頑張れ！！！」

仁は重症の弟を懸命に処置した。

賢は一命をとりとめ、無事だった。

賢が必死に発した言葉「ごめん」。

仁は麗加に話を聞いたときに感じた予感が、的中したのだと思うと、険しい表情になっていた。

絶縁状態の弟との再会が意味するものとは・・・。

朝になっても病院内は騒然としていた。

目が覚め、病室から出た麗加は驚きを隠せなかった。

「何・・・これ・・・」

そこは負傷した人々で一杯だった。

一体これは何事か・・・。

その時、ＴＶ画面から爆発のニュースが目に飛び込んできた。

あの爆発が、他の街でも起きた。

その光景はいつか授業で見た戦争の光景に見えた。

今、世界では何が起こり始めているんだろうか・・・。

麗加は呆然と立ち尽くしてしまった。

「ママァ・・・・」

麗加は子供の泣き声に気がついた。

ふとその方を見ると、腕に痛々しい擦り傷を負った小さな男の子が、母親を探して泣きながら歩いていた。

麗加は、自分の弟と同じくらいのその子を見ると一瞬辛さが過ぎったが、男の子に近づいていった。

「僕、どうしたの？ママいないの？」

「うぅ・・・ママいない・・・うでいたいよぉ」

「見せてみて。可愛そうに・・・」

麗加は男の子の傷を見ると、無意識に怪我の部分に手をかざした。

すると優しい光を放ちながら、不思議な力で癒していた。

唖然と男の子は麗加を見つめた。

「おねーちゃん・・・？」

男の子に声をかけられ我に返った麗加は、今自分は何をしたのか・・・怖くなり、あわてて病室に戻っていった。

「私・・・今何を？？？？」

また自分の中の、何かが力を発揮していた。

世の中で起きていることも、自分自身に起きていることも全く理解

が出来ない。

～13～

その頃、学校では勇也の所属するチームに試合の中止が言い渡されていた。

対戦校は昨夜爆発が起きたレッドタウンの学校だった。

幸い学校は一部が被害にあっただけで、生徒は無事とのことだったが同時に不安の色は隠しきれなかった。

「残念だったな。勇也、スタメン選ばれてたのに」

そう言ったのは勇也の親友の東海林星夜（しょうじせいや）だった。

「しかたねーよ。」

二人は教室に戻っていく。

「でも、一体何が起きてんだろうな・・・」

勇也は窓から空を見上げた。

ドン！ドンドン！！

麗加の病室のドアから、か弱いノック音がした。

一瞬麗加はビクついたが、その先の声に肩を降ろした。

「おねーちゃん・・？大丈夫？？おねーちゃんも痛かったの？？？」

先ほどの男の子が心配して麗加の病室までついてきたようだ。

麗加はそっとドアを開けた。

「大丈夫だよ。ちょっとびっくりしちゃったの。ごめんね」

「おねーちゃん魔法使いさん？僕ここ痛いのなくなっちゃったよ！！ありがとう！！」

麗加は微笑んだ。

麗加は男の子の手を取り、元の場所に戻った。

丁度治療を終えた母親が治療室から出てきた。

母親は腕を固定されており、顔や首にも痛々しい擦り傷があった。

「ママッ！！！」

「隼人！！ごめんね！！良かったわ！」

「あのおねーちゃんが、痛いの治してくれたの！！」

そう言って男の子は麗加を指差した。

一瞬母親は不思議そうに麗加を見たので、麗加は視線をそらしてしまった。

しかし、母親はすぐに笑顔で麗加の元に足を進めた。

「治療中ご面倒おかけして、ありがとうございました」

「あ、いえいえ！！」

親子は麗加に御礼を告げると、病院を後にした。

あの力のことを言われ、変な目で見られるかと思ったが、普通には理解できないことだろう。

しかし、麗加は自分は何かしらの能力を持っていることを確信したのだった。

～14～

数日後、院内も落ち着きを取り戻した頃、麗加は改めて検査を依頼しようと仁の元へ向かうことにした。

仁は丁度、弟の賢の病室にいた。

賢も安静状態だが話が出来るまでに回復していた。

二人は久々に「家族」として同じ空間に立っていた。

しかし、それはとても和やかとは言えない空間だった。

「兄さん・・・兄さんの言った通りだったよ」

「・・・。」

賢は、ＴＡＧＡＭＩｓｃｉｅｎｃｅの田神スン科学博士の次男だ。

仁は実は長男だったのだ。

仁の本名は田神仁。

だが、あの田神スン科学博士とは縁を切っておりその姓を使いたくなかった仁は名前を「仁」とだけ名乗っていたのだった。

「イエロータウンにはスンの研究所があったな。今回のあの爆発はそれが関係しているのか？

スンは完成真近で「製品」を発表していた・・・今回のは、大掛

かりなプロジェクトだったそうじゃないか。
大方、テロにでもあって爆発されたんじゃないのか？スンは少々恨みを買うようなやり方があったからな。
俺はあの人のやり方が理解できなかった。だから研究を継ぐつもりもなかったんだ。
いつかこうなると思っていたから・・・」

普段は温厚な仁が、厳しい口調で話した。

賢は重い表情で語り始めた。

「確かに、父さんのやり方には少々強引なものがあった。あれだけの精巧なアンドロイドを作るのに裏で違法なこともしていた。
でも、今回のことはテロにあったとかそう言う問題じゃないんだ・・・」

「違うのか・・・？」

賢は大きく息を呑み、思いきって口を開く。

「先日発表したＡ－Ｄ２Ｘが衛星の故障により暴走をしている。あの爆発はＡ－Ｄ２Ｘが起こしたものだったらしい」

「どういうことだよ・・・言ってることの意味が分らない」

「父さんは・・・おそらくその時に・・・」

二人の間に沈黙が走った。

その頃、麗加は仁の元へ向かっていた。
途中であった看護婦に聞くと、被害にあった弟の病室にいると聞き、麗加は仁のいる賢の病室へと向かったのだった。

「Ａ－Ｄ２Ｘは衛星で作動管理をすべて行えるようにしてあった。
でも、スペース・デブリが他の衛星と衝突して、その破片がＡ－Ｄ２Ｘ衛星に直撃して、衛星は大破した。
管理元が破壊された場合、Ａ－Ｄ２Ｘは作動不可能になるはずだった。
だけど、Ａ－Ｄ２Ｘは作動してしまった・・・」

「誤作動したって訳か・・・？」

賢は目を閉じ、悲痛な表情を浮かべた。

「プロジェクトは失敗だ・・・
アイツが、指示なしで動いてるという事が大問題だ。
ＴＡＧＡＭＩｓｃｉｅｎｃｅではすぐに誤作動したＡ－Ｄ２Ｘの停止処理に取り掛かった。
でも、アイツの威力は設定以上で・・・」

ＴＡＧＡＭＩｓｃｉｅｎｃｅであの夜、Ａ－Ｄ２Ｘの異常に気がついた研究員が、慌ててスンに報告に向かうとき、そこにはＡ－Ｄ２Ｘがいた。
Ａ－Ｄ２Ｘは研究員を抹殺し、自分が停止させられるのを阻止した。
最終手段を持つスンでさえその力に敵わず、抹殺されてしまった。

そして、暴走したＡ－Ｄ２Ｘは街ごと何らかの形で破壊したのだ。
賢はあの日の出来事をそう推理していた。
「あくまでこれは一つの仮説だけど・・・
アイツは暴走マシーンになってる可能性がある・・・」
元々防衛システムが搭載してあるタイプだ。
もし、そのプログラムが自分自身に稼動しているとしたら・・・
自分を阻止しようとするものすべてを、抹殺するかもしれない。
「レッドタウンの爆発も、Ａ－Ｄ２Ｘだ・・・
あの日、アイツは僕の研究所に現れたんだ。」
「それで、阻止しようとしたのか・・・？」
賢は静かにうなずいた。
「案の定、研究所が破壊された・・・
爆発の規模は父さんの時より小さかったけど、
人間の手で造っておきながら、人間の力では敵わないなんて・・・
」
「それでも、ここには沢山の犠牲者が来たんだぞ！
そんなことで済むか！！
イエロータウンの爆発で沢山の人が死んだ！！
ここ（病院）にはその被害者もいるんだ！！

まさか・・・自分の家族したことのせいで被害に遭った人たちを助けてるなんて・・・」

～15～

ガタッ・・・。

その時、病室の戸のあたりで音がした。

二人はハッとし、その方を見ると、そこには・・・。

「先・・生、あの・・・・」

そこには麗加がいた。

麗加は途中からの話を聞いてしまった。

すべてを理解したわけではないが、ただ事ではない話に困惑し、その場を走り去った。

「暮内さん!!」

仁は慌てて追いかけた。

話を聞かれた・・・。

「暮内さん!!待って!!!!」

仁は麗加の腕をつかみ止めた。

「先生・・・あの人誰??
イエロータウンの爆発って??
A－D2Xって・・・??
暴走マシーンって・・・??」

仁は何も言えなかった。

麗加は怖くなり、仁の手を振り払って再び走り出した。

「暮内さん!!!」

麗加は夢中で走った。

院外に出ており、仁は応援を頼んで後を追った。

『パパやママや麗雄は殺されたの!!?』

それだけは理解した麗加。

回りも見ずに飛び出したその時・・・。

ギュイイイイイイイイ!!!!!!

急ブレーキを踏みながらモーターカーが麗加に迫り寄せていた。

麗加は道路に飛び出していた。

このままいっそ私も死んでしまおうか・・・。

一瞬そう思ったが、不意に勇也の笑顔が浮かんだ。

麗加はとっさにかがんだ。

「キャァァァ！！！！」

その時、麗加の半径1～2メートル程のところでモーターカーは跳ね返った。

「え・・・・」

その瞬間を見た仁は息を呑んだ。

「今のは・・・一体」

麗加は、そっと顔を上げた。

目の前には衝突で散ったであろうモーターカーの部品が散らばっていた。

それも麗加を避けるように円を描いて。

運転手は軽症を負っていたが無事のようだ。

しかし、轢きそうになった少女が無傷でそこにいることに驚いているようだ。

一体何が起きたのか・・・。

麗加は震えだした。

「何・・・何なの・・・・？」

パニックに陥り、そのままその場で気を失った。

仁は倒れた麗加の元に駆け寄った。

「暮内さん！！！」

応援に駆けつけた医師らが担架に乗せた。

軽症の運転手も連れ病院へと戻った。

事故の衝撃で負傷したのではないことはすぐに分り、少し安心した

仁だが、あれが麗加の言っていた不思議な力なのだろうか。

現場は騒然としていた。

すぐに警察も来て、野次馬も増えてきた。

その中に、じっとその光景を見ていた一人の男の姿があった。

麗加は鎮静剤で静かに眠っていた。

賢も安静にしていなければならないので話は一旦置く事にした。

仁は頭を抱えて一人悩んでいた。

世界的に名を広げるほどの才能を持った父親が最後に作った防衛用サイボーグが暴走。

そして麗加の不思議な力。

医学だけでは解明できそうもない問題だった。

父親は死に、賢も重傷を負った。

絶縁していたとはいえ家族の問題だ。

放っておけば世の中どうなってしまうのか・・・考えただけで背筋が凍る思いだった。

自分も同じ血を分けた人間だ。

何か出来るかもしれない。

でも・・・。

思いつめる仁の様子をそっと見つめる女性がいた。

「先生・・・大丈夫ですか？」

気遣いながら声をかけたのは青木真純（あおきまきよ）。

過去に重い喘息を患い仁が助けた相手である。

真純も医学に目覚め、今では仁の片腕的存在だ。

「あぁ、大丈夫だよ」

「あまり、無理なさらないでくださいね」

「ありがとう」

～16～

数日後、麗加はまた落ち着きを取り戻していた。
しかし、仁とはギクシャクしていた。
賢との部屋での会話の意味も聞くに聞けないし、力もあの日に見られている。
医者ではどうにも出来ないのかもしれない。
益々自分の置かれている状況に不安を抱いた。
麗加は屋上で一人空を見上げていた。

「兄さん・・・前の話には実は続きがあるんだ・・・」
賢は定期検査に来た仁に話を切り出した。
「アンドロイドの暴走の他にもまだあるって言うのか
一体どこまで事を大きくする気だ・・・」
「実は僕・・・・」
それを聞いた仁はまた言葉を失った。

その頃、麗加のいる屋上の上空に一つの影が現れた。
影は静かに麗加のいる屋上に降り立った。
気配に気がついた麗加は振り向いた。
そこにいたのは見知らぬ青年だった。
麗加は警戒した。
いつからいたんだろうか・・・。
「何・・・？あなた誰？？」
青年はじっと麗加の目を見ていた。
中央で分けた前髪が、鋭い目に被っている。
１８０センチあるのではという長身で、引き締まった腕を晒していた。
麗加はハッとし、イエロータウンの爆発の時に見た人影を思い出した。
麗加の中でフラッシュバックが起こる。
影と青年が重なった。
麗加は振えと汗が止まらなくなった。

あの日の光景が蘇る。

麗加に向けて放たれた光・・・

「いやぁあぁぁぁぁ！！！！！」

叫びと共に麗加は力を使ってしまった。

自身を守るかのように円を描いて爆風が起こる。

しかし青年は微動だにせず、さらりとそれをかわした。

麗加は驚き怯えた。

あの、仁らが言っていた暴走マシーンがコイツなのか・・・

そして今目の前にいる。

殺される・・・。

「やっぱりな、お前も志願したのか」

青年は口を開いた。

志願・・・？

麗加は何のことなのか分らなかった。

「志願・・・？？何のこと？」

「とぼけなくてもいい。俺はお前の仲間だ」

「な・・何を言っているの・・・？あなた何者？」

青年は確信を覆す麗加の発言に疑問を抱く。

「何？お前もサイボーグなのではないのか・・・？」

「え・・？？」

「その力は賢が与えたものではないのか？」

「どういうこと・・・？」

青年は自分のことを話し出した。

名前は丹波豪（たんばごう）。

歳は麗加と同じ１７歳だ。

豪はイエロータウンの住人で、両親を早くに亡くし、４人の弟妹達と暮らしていた。

あの日、豪は弟たちを残し大きなこの街に買出しに来ていた。

その時にイエロータウンが爆発。

豪は一瞬で家族を失った。

～17～

街が変わり果てた姿で落ち着いた頃、豪は必死でイエロータウンに戻った。

その時何かを捜査している男たちを見つけた。

そこにいたのは賢と2名の研究員だった。

豪は賢に近づき何があったのかを聞き、怒りを爆発させた。

「ここで俺の家族が待ってたんだ・・・
それをあんたらの「失敗」で失ったって言うのか！？
ふざけんな！！！！」

豪は賢に掴みかかり怒りをぶつけた。

最初は意味が分らなかった。

意図的に賢らが街を破壊したのかとすら思えた。

しかし、彼らも必死だった。

豪は深い悲しみと怒りを胸に刻んだ。

そして、自分の中にある決意が浮かんだ。

「あんたＴＡＧＡＭＩｓｃｉｅｎｃｅの人間なんだろ
だったら俺を改造しろ！」

賢は豪の申し出に驚いたが、即断った。

「それは出来ない…
　僕らのした事で被害に巻き込んでしまった上、それでは責任まで押しつける事になる」

被害者を更に巻き込むなんてことは到底出来ない。

「これは僕らの問題です
　気持ちはとても感謝致します」

でも、自分たちの力で止めることも正直現段階では出来ない。

豪は家族を失い、生きる意味を失った。

それを奪った人造人間を自分が潰してやると心に誓ったのだ。

豪は諦めなかった。

「俺はヤツに大事な家族を奪われた
　俺にはもう生きる意味がない
　もちろんあんなものを生み出したあんたらだって憎いさ
　でもヤツは俺の手で潰したい」

そのために、自らの体をサイボーグ化し、匹敵するプログラムを打ち込んでもらえば潰せるだろうと話を持ちかけた。

しかし、人間をサイボーグ化することは違法行為であった。

「仮に、君に強力な戦闘力をプログラムし、それを君自身の意思でコントロールして、感情によって爆大なパワーを引きだせればＡＩＤ２Ｘを停止させる事が出来るかもしれない…
だけど、人間を戦闘用にサイボーグ化させることは違法行為なんだ君まで巻き込む訳にはいかない」

賢はなかなか首を縦に振らなかった。

「今更違法もクソもあるか！！
だったら他に手はあるのか！？
奴を止めなければこんな爆発は他にもどんどん起こるかもしれない！
地球そのものがふっ飛ぶ可能性だって有り得る！
時間はないはずだ！」

「君はどうしてそこまでしてくれようと…？」

「俺はＴＡＧＡＭＩに憧れていたんだ
今回のプロジェクトだってホントはすげぇと思った
いつか俺もプロジェクトに関われる日を目標にしてたんだ
こんなことになるとは微塵も思わなかったが…
憧れが憎しみに変わったが、逆に俺がＴＡＧＡＭＩのプロジェクトを潰してやれる
光栄なことだ」

賢は申し訳なさと有難さで何度も豪に頭を下げた。

「全く情けない話だ…
すまない…」

そして豪は言った。

「奴にあんたらは殺させない
あんたらを殺すのも俺だ」

豪は賢の研究所へ一緒に行った。

地下奥深くの部屋に入った。

性能なコンピューターに賢は一睡もしないでサイボーグ化するためのプログラムを打ち込んだ。

そして豪はコンピューターによりサイボーグ化したのだった。

それから1ヶ月以上が経ち、生まれ変わった豪が外へと出てみると、そこも爆発の跡地になっていた。

豪は怒りを覚え、賢の生命反応を頼りにこの街へとやってきた。

そして偶然麗加の事故現場を見て、麗加も同じサイボーグ化した人間なんだと思ったのだ。

「意味が分らない・・・確かに私も、あの爆発で家族が死んだ
でも、私は何もされてない普通の人間なのよ？
あなたがサイボーグだと言うのも、理解が出来ない・・・」

「でもお前も奴のせいで大事な家族を失ったんだ

お前も仇を討ちたいんではないのか？」

「それは・・・
でも私にはそんなこと・・・」

「この前の事故といい今日の俺を見たときに発したあの力はなんだ？
あの力が人間の体で出されているとしたら、お前は相当な力を持っていると思うがな」

事故があった現場で麗加の力を目撃していたのは豪だった。

「やめて！！」

麗加は豪の話を断ち切った。

豪は口を閉ざし、静かにこの場を去った。

宙に浮きゆっくりと飛んでいった。

「飛んで・・・！！？」

麗加は見えなくなるまで豪から目が離せなかった。

～18～

同じ頃賢も仁にこのいきさつを話していた。

「人間をサイボーグ化することは違法だ！
知らないとは言わせないぞ！」

仁は事の深刻さに取り乱した。

「このことが大罪なのは分かっている…
でも、正直僕もそれ以外に方法が見つからなかった
僕がサイボーグ化する手もあったが、精巧なプログラムを打てる人間が他にいなかった
また一からＡ－Ｄ２Ｘ抹殺装置を作ろうにも、奴の設計図は父さんと一緒に・・・」

悩んだ末の決断・・・

一人の人間を犠牲にした罪は大きかった。

しかし話を聞いた仁は先ほどとは打って変わり冷静に考えを口にした。

「データーが残っていなければ停止は不可能
サイボーグ化した人間ならプログラムよりも優れた判断が出来るし、
自らの意思でパワーも操れる・・・か」

妙に素直に受け入れた様子の仁に疑問の目を向けながら賢が答える。

「感情を持っている分爆発的なパワーを出せる確立は五分五分だけど・・・」

仁は何かを決意したように言った。

「賢、その豪は完璧なのか？」

「生身の臓器は持ったままだから、それなりに力を使えば負担はあるメンテナンスと治療は欠かせない・・・」

「わかった
俺でも役に立てそうだな・・・」

「兄さん」

仁はどんな事態を告げられようと、弟の力になろうと既にどこかで決意を固めていたのかもしれない。

「まさか、ＴＡＧＡＭＩの終わりに関わることになるとはなとりあえずお前は回復することだけ考えろ」

「すまない・・・兄さん」

仁はたった一人生き残った弟の罪を被る決意をしていた。

２つの爆発後、嘘だったかのように平穏な日が続いていた。

麗加は屋上で過ごすことが多くなり、豪に言われたことを思い出していた。

『お前も奴のせいで大事な家族を失ったんだ
　お前も仇を討ちたいんではないのか？』

人造人間が家族を殺した。

病院にいたレッドタウンの爆発の被害者。

天才的な科学者が作り出した失敗作の暴走マシーン。

恐怖心が過ぎるが、到底信用できない話だ。

豪は復讐のためだけに生まれ変わった。

守るものを守れなかった悔しさ。

でもそこまで出来るものだろうか？

麗加の大事なものは、家族はもちろん友達、そして・・・。

麗加は気づいた。

自分にはまだ失っていない大事なものがあるんだ。

この街でもあの爆発がもし起ってしまったら・・・。

それさえも失ってしまうかもしれない。
大事なものは失ってからでは遅い。
それを阻止するには、その人造人間を止めなくてはならない。
そして、それが自分に出来ることなのか・・・。
『お前は相当な力を持っていると思うがな』
あの力は、そこまでのパワーがあるんだろうか。
考えていると頭が痛くなった。
そんなこと無理に決まってる。
麗加は頭を何度も振って、考えを振り切った。
「そんなこと、出来るわけない
それに、こんな現実受け入れられない」
麗加は自分の中で否定した。
でも、どこか否定しきれない気持ちになっていた。
本当に、自分に出来るのだろうか・・・。
でもどうすれば・・・。

麗加はもう一度豪に会って話しがしたいと思った。

豪の生みの親がココにいるならきっとまた現れるだろう。

それまで、自分の気持ちも少し整理しておこう。

そして仁ともちゃんと話をしよう。

そう思い、麗加は病室に戻ることにした。

屋上を後にし、階段のドアに手をかけた。

～19～

その時、

ズキッ・・・・！！！

「っ・・・・！！」

麗加はその場にしゃがみこんだ。

突然頭に激しい痛みが走った。

「う・・・・っ」

痛みはすぐに治まった。

「今のは・・・なんだったんだろう・・・・」

色々考えすぎて疲れてるのかもしれない。

やっぱり一度仁にちゃんと検査もしてもらおう。

麗加は屋上を去った。

後日、麗加は仁に検査をしてもらっていた。

精密な検査をした結果に仁が目を通す。

「ん～、特に大きな異常はないみたいだ」

「それなら良かった・・・」

麗加は仁のその一言にほっと胸をなでおろした。

「いろんな事が一気にありすぎて疲れが出たんだろうね」

麗加は表情を曇らせうつむいた。

その様子に気がつき仁は続けて声をかけた。

「ほ、他に気になることはない？」

麗加はこの前の頭痛の事を言おうかと思ったが、疲れが原因だと思い言うのをやめた。

「んん。大丈夫！」

麗加が笑顔で答える。

「ん。」

仁も安堵の表情を浮かべた。

「もうしばらく休養して様子を見ようか」

「はい」

麗加は診察室を出て病室に戻った。

仁は一人になってからもう一度麗加の診断書に目を通した。

「この数値は・・・」

そこに実は、一つ異常な数値が出ていたことに疑問を抱いた。

麗加は病室の窓から外を眺めた。

あの、豪という青年はあれからどこへ行ってしまったんだろう。

彼は、自分を改造してまで仇を取ろうとしている。

彼を駆り立てるものはなんなんだろう。

麗加はＥ－ｎｏｔｅ（電子手帳）を開き、日記のページに書き込みを始めた。

それはあの日豪に合った日から始まっていた。

自分の身に起きた様々な出来事、謎の力。

これらが自分にとってどんな意味があるのか・・・。

今までにない経験をし、最初は何気なく書いていたのだが、次第にそれは麗加自身の答えを探すために書き綴るものになっていた。

～20～

その頃病院のロビーには豪の姿があった。

賢の気配を探り病室へ向かう。

仁は麗加の診断書を置き頬杖を付いた時看護婦に賢の検査の時間だと呼ばれ、他の医師に詳しく調べるよう指示をし賢の病室へ向かった。

二人は廊下で鉢合わせた。

仁は豪を見ると、見ない顔だな・・・と思いながらも賢の病室に行く為豪に近づいた。

豪も仁を見ると、賢と同じものを感じとっていた。

「どちらの病室をお探しですか？」

仁が豪に声をかける。

豪は表情一つ変えないで仁の目をじっと見ていた。

そして、

「俺は丹波豪。田神賢に会いに来た」

仁はハッとした。

「君が…」

目を丸くして豪の姿を見渡した。

まるで珍しいものでも見るかのようだった。

「俺がそんなに珍しいのか？」

ずばり豪に当てられ仁は我に返った。

「失礼…」

仁は慌てて目を反らした。

話に聞いた時、改造された人間はそれなりにどこか特徴が見られるものだと勝手な想像をした。

しかし目の前にいる豪は全く人間そのものだったのだ。

サイボーグだと言われても冗談にしか聞こえないくらいだ。

「賢の担当医なのか？」

豪は仁にたずねた。

「はい。賢の兄でもあります田神仁です」

それを聞いて豪も少し反応した。

「やっぱりそうか。同じ目をしている」

仁は少し恐怖心を覚えたが、毅然とした対応をした。

「これから賢は定期検査があります。その後の面会でも構いませんか？」

「…分かった」

豪は素直に応じた。

「では１０分ほどお待ち下さい」

会釈をして仁は賢の病室に入った。

戸を閉め大きく息を吐いた。

気を取り直し、カーテン越しの賢のベッドに顔を覗かせた。

「賢、調子はどうだ？」

「問題ないよ」

先に来ていた看護婦に採血をされながら賢は答えた。

賢はだいぶ回復に向かっていた。

まだ痛々しい包帯は取れないが、食事などは自分で出来るようになっていた。

検査が終わると仁は看護婦に先に戻るように指示をし、病室に二人

になったところで賢に告げた。

「お客さんが来てる」

「客？」

疑問を抱く賢を待たせ、仁は外で待つ豪を呼びに行った。

「お待たせしました。中へどうぞ」

豪は静かに病室へと入り賢の前に姿を見せた。

「豪！」

賢は驚いて身を乗り出した。

「久しぶりだな」

「そうか、プログラムは上手くいったようだな！」

賢は安堵の笑みを浮かべた。

豪は表情一つ変えない。

賢は悟った。

先ほどとは変わって表情を曇らせた。

「…僕を殺しに来たんだね」

その目は覚悟に満ちた目だった。

「なんだって！？」

仁は一瞬焦りを見せたが二人の間に何かを感じその場から動くことはできなかった。

豪は険しい目つきになり賢を睨みつけた。

静かに目を閉じ、表情を戻した。

「お前にはまだ生きてもらう」

豪が賢に放った。

「俺はまだ完璧ではない。お前にサポートしてもらわなければならないことが沢山ある。
それにあいつの手がかりも集める必要があるからな」

賢は静かに微笑んだ。

「そうだね。分かった」

感じたことのない不思議な空気に、仁はただ見ていることしか出来なかった。

～21～

豪と仁は賢のベッドを囲む形で座った。

「俺には何が出来る？」

豪がいきなり本題に入った。

賢は落ち着いた様子で説明を始めた。

「豪にはＳｋｙ　ｓｙｓｔｅｍ（飛行）とＩｎｆｉｎｉｔｅ　ｐｏｗｅｒ（無限の力）が備わっている」

「Ｓｋｙ　ｓｙｓｔｅｍについては習得済みだ。既に活用させてもらっている」

「Ｓｋｙ　ｓｙｓｔｅｍはあまり人目につくところでは自粛してくれ。君がＡ－Ｄ２Ｘだと疑われる可能性がある。
まだあいつの存在は世の中には知れていないハズだが余計に人類を困惑に導く」

賢が少し慌てて説得した。

豪は静かに答えた。

「・・・了解した」

豪は麗加に見られていることはこの場では伏せた。

賢の様態から余計な興奮をさせると面倒なことになると思ったのだった。

それに麗加の存在はいずれ必要になると豪はどこかで思っていた。

「君のタイプはＣ－Ａ２Ｘ型、Ｃ－ＡはＣｙｂｏｒｇ　Ａｔｔａｃｒの略称だ」

「攻撃型という訳だな」

「そう、それに対してＡ－Ｄ２ＸはＡｎｄｒｏｉｄ　Ｄｅｆｅｎｃｅ。防衛型になる。

奴はプログラムされたカードを持つ人間の危機を察し防衛をするように作られた。

防衛方法として銃での遠方攻撃には弾丸も貫かない強力なボディで防衛者を守る、接近攻撃では正当防衛を働かせ攻撃することもある。

つまり攻撃要素も持ち合わせている。

正当防衛はその対象の力に合わせるシステムになっているけど、どんな攻撃にも勝るものでないといけないため、最大攻撃力を発揮すれば並みの攻撃力では敵わない相当な力になる」

「防衛の為の攻撃力も持ち合わせている。攻撃すればするほど比例してそいつも強さを出すと言う訳か」

「だから豪にはそれを越える力が必要だ。君には攻撃を重点に置いたプログラムを打ち込んだ」

「俺に守りは必要ないからな。それで問題はない」

豪は納得している様子で答えた。
それを聞いた仁はどこか安心した表情で言った。
「じゃあ、Ａ－Ｄ２Ｘが見つかれば豪がすぐにそいつを抹消出来るってことなのか？奴の防衛力を越える力を豪は持っているんだ」
だが、賢の表情は一向に深刻そうなままだった。
「理論上はそう言うことになる」
賢は一瞬穏やかになった雰囲気を壊すのを躊躇ったが、すぐにそれも壊した。
「ただ、実際は・・・」
そう口を開いた賢に二人は視線を向けた。
「Ａ－Ｄ２Ｘ衛星が機能してないはずなのに、Ａ－Ｄ２Ｘは動いている。
これは理論上では起こり得ない話なんだ」
その一言に二人はさっきまでの余裕を失った。
仁は以前賢から聞かされた事を思い出した。
「管理元が破壊された場合、Ａ－Ｄ２Ｘは作動不可能になるはずだった、そうだったな。
それが指示なしで動いているという事がどういう事なのか」

「それについて何か進展はあったのか？あんたの考えを聞かせてもらおうか」

豪は腕を組み冷静に賢に問いかけた。

「指示がない状態で機能している、これはもうＡ－Ｄ２Ｘには何らかの自立心が芽生えているとしか考えられない。
極論を言うと「感情」を持っていることになる」

「ロボットが感情を持つ・・・？」

その重大さを仁はすぐに理解した。

「さっきも言ったように奴は防衛型だ。
防衛の対象が何らかのトラブルで自分自身になったとすると、Ａ－Ｄ２Ｘを阻止しようとした者から自身を防衛する為にシステムが作動する。
しかしその力は対象によって加減されるはずだ。
でも、町ごと爆発を起こせるなんて・・・そんな数値はプログラムされてはいないんだ」

「何が言いたい？」

慎重な賢に対し豪は早く結論が聞きたかった。

「Ａ－Ｄ２Ｘは感情によって莫大な力を発揮できるようになっていると考えられる」

「まるで怪物だな・・・」

豪は吐き捨てるように言った。

「豪のＩｎｆｉｎｉｔｅ　ｐｏｗｅｒも引き出すには君自身の感情が影響する。
それは感情が力を規制してしまうこともあるという事だ。
豪の体は半分が生身のままだ。
仮にＩｎｆｉｎｉｔｅ　ｐｏｗｅｒを引き起こしたとしてもその身が先に悲鳴をあげる可能性が高いんだ。
理論上Ａ－Ｄ２Ｘを超える力を持っていても、発揮できる力に差が出れば・・・」

「何故俺を完全なサイボーグ化しなかったんだ！」

豪は立ち上がり大声で発した。

「僕には、君から君自身を奪うことまでは出来ない。
それにそうしてしまったら、君の意思で復讐するという事にはならないだろう」

「ちっ！余計な情を・・・」

病室は険悪な空気で一杯になった。

～22～

しばらくの沈黙を豪が破った。

「くよくよしていても仕方ない。俺にその力を引き出せればいい話だ」

「それに、奴のその感情の発端を止めれば軽減できるかもしれないしな。
医学的に精神解明をしてみる。
何か参考になるかもしれない。俺にも力になれることはあるはずだ」

続いて仁が発言した。

「あと、兄さんに一番大事なことを頼みたい・・・」

賢がすがる様に言った。

「分かってるさ」

仁は豪を見て言った。

「豪、君の身体メンテナンスは俺が担当する。
何か異変を感じたりしたときはすぐに来て欲しい」

豪も仁の目をしっかりと見た。

「あぁ、よろしく頼む」

「とりあえずやれる事から始めよう」
仁が場を仕切り直すように言った。
「そうだな。俺は奴の情報を集める」
「それなら、まずレッドタウンの僕の地下研究所に行ってくれないか？そこに少しならバックアップデータが残ってるはずだ」
豪に賢は呼びかけた。
「分かった。とり合えずそれらしい物は持ってくる」
豪は病室を後にした。

「そのデータが集まれば何とかなるのか？」
仁が賢に問う。
「僕が預かったのはあくまで、Ａ－Ｄ２Ｘのメンテナンス用のデータだけだ。
構造やシステムのデータは複製防止の為に管理者である父さんの身に何かあれば抹消されることになってる。
正直役に立つものとは思えないけど」
「そうか。全く、恐ろしい奴らだ。お前も父さんも・・・この俺もな」

病室を後にした豪はＳｋｙ　ｓｙｓｔｅｍを自粛したため、歩いて行動していた。

自分の足では大した距離を移動出来ない事を改めて実感する。

「実に不便な生き物だな・・・」

階段を下りていると豪は聞き覚えのある声に呼び止められた。

「あのっ！」

振り返るとそこにいたのは、少し息の切らした麗加だった。

麗加が丁度病室を出たときに豪の姿を見つけ、急いで追いかけた。

「どうした？」

麗加は少し困ったような顔をしてうつむいた。

「あ、えっと・・・」

いざ豪を前にすると何を話せばいいのか分からなくなる。

まだ自分の気持ちにも整理がつかなく、どうしたらいいのか聞きたかっただけなのだが。

「悪いが急ぐんでな」

豪が去ろうとすると、麗加は心境を口に出した。

「私分からないの。自分がどうしたいのか。だからもう一度あなたに会って話したかったの」

豪は再び立ち止まり、振り返って一言だけ言った。

「お前が今、俺に話しかける行動をした。それがもう答えだ」

「え？」

麗加はその場に留まった。

私が今こうしてる事がもう「答え」？

彼に問うことを求めた。

それは何故？

私はただの人間。

何の力も持たず、何の能力もない。

事故で体に傷を負い、家族を亡くして心に傷を負い、その傷を癒し治すために治療をしているただの人間。

それだけなら、自身を改造したという彼の言葉を鵜呑みにはしていない。

信じられるはずがない。

自分にも何かできるかなんて考えられない。

だけど私は。

「暮内さん？」

立ち尽くしている麗加の姿に気が付き、賢の部屋から出てきた仁に声をかけられ我に返る。

「どうかしたの？具合でも悪くなった？」

「んん。何でもない」

笑って見せる麗加。

しかし次に見せた一瞬の目を見て仁はさっきまで見ていた者と同じものを感じた。

～23～

豪は人気のないところまで出るとＳｋｙ　ｓｙｓｔｅｍを起動させ空高く上がった。

その時上空から何かを感じ見上げた。

「なんだ！！」

一瞬キラッと光った小さな光が物凄いスピードで落下していった。

それは火の玉のような物で、麗加が在籍する学校の付近へ向かっていた。

「まさか・・・Ａ－Ｄ２Ｘか！！」

豪はそれが落ちてきた方向へフルスピードで向かった。

物体は激しい炎に包まれたまま地上へと距離を縮めていた。

学校では生徒たちが部活動に励んでいる。

グランドではサッカー部が練習をしていた。

部員の一人が空からの異変に気がつく。

「ん？なんだ・・・？」

部員たちが気づき騒ぎ声を上げているとそれはグランドへと落ちて

きた。

それはある生徒の背後に迫っている・・・

「邦鷹ーー！！」

名を呼ばれた勇也が振り返り空を見上げると目の前には火の玉が・・・

「うわぁ！！」

そのまま火の玉は地上に落ちた。

ドーーン！！

黒い煙を上げ、視界を遮った。

「勇也！！！」

星夜が叫ぶ。

煙が晴れてくると、数メートルほどの穴が出来ておりその真ん中には何かが激しく燃えたような黒く焦げた塊が落ちていた。

その穴の横で倒れている勇也がいた。

「大丈夫か！！」

顧問と部員が勇也のもとに駆けつける。

「う・・・ってぇ・・・」

勇也は無事だった。

そして勇也の傍らにはもう一人おり、体を起こした。

「邦鷹、大丈夫だった？」

無造作に伸びた金に近い白髪と、青い澄んだ瞳が印象的な若い男が勇也に問う。

この男がとっさに勇也を助けていたのだ。

「はい・・せんせありが・・・っつ！！」

立ち上がろうとした勇也がしゃがみ込んだ。

突然のことに足を痛めたのだ。

「足痛めたの？」

問うと勇也は膝を押さえカナリの痛覚に顔を歪ませていた。

「先生！邦鷹を急いで病院へ！！」

男は顧問の教師に告げた。

「分かった！直ぐに手配してくる！」

顧問は保健室へとかけて行った。

「邦鷹・・・」

部員らが心配そうに勇也を見守っている。

勇也は養護の先生と顧問と共に学校が提携を結ぶ田神総合病院へ運ばれた。

その様子は校内にいた生徒らも気がつき野次馬となっていた。

「ちょ！邦鷹じゃん！！！麗加！！麗加に知らせなきゃ！！」

運び出される勇也を目撃した千風と美兎は不謹慎にも、同じ病院に向かった勇也の事を麗加にメールで伝えることにした。

星夜は勇也をかばった男に近づく。

勇也に対して殆ど傷を負わなかった男。

「須吾（すあ）先生は怪我なかった？」

星夜が彼を須吾と呼んだ。

「僕は大丈夫だよ。ありがとう」

須吾は笑顔をみせ答えた。

星夜もその笑顔に安堵の表情をみせた。

「良かった。先生ありがとな勇也助けてくれて」

そう言うと突然落下してきた謎の物体に目を向けた。

一体これはなんなのだろうか。

須吾も表情を変えていた。

上空でその先を追っていた豪も、その正体を見つけることが出来なかった。

「どこに行きやがった！！ちくしょう！！」

これもまた、爆発事件と関係があるのだろうか。

～24～

麗加は自分の病室で日課の日記を書いていた。

Ｅ－ｎｏｔｅのキーを叩いているとメールのアイコンが点滅していることに気がつく。

麗加はメールボックスを開いた。

「あ、千風からだ」

メールを開けて読んでみると、麗加は言葉を失った。

『麗加大変だよ！邦鷹が部活中に怪我して今麗加がいる病院に運ばれたの！！

膝痛めただけっぽいんだけど、もしかしたら会えるかもよ！！

怪我の原因は話すと長いんだけど・・・』

麗加は最後まで読み終わらないうちに病室を飛び出した。

千風は麗加を喜ばせようとして送った情報だったが、麗加は病院に運び込まれたという事に強い不安を覚えた。

ロビーに出てみると、病院の入り口で車椅子に乗った勇也が診察室に運ばれていくのを目撃した。

痛そうに目を向ける先の足は血も出ていて思ったよりも酷く見えた。

麗加はその場から動けなくなり、ショックで座り込んだ。

診察室では仁が処置に当たっていた。

「少し火傷もしているようだけど、一体何があったんですか？」

よろけた拍子に痛めただけでは無さそうな怪我に疑問を抱く。

付き添いの顧問が状況を説明した。

「一瞬のことで何が起きたのか・・・
ただ空から火の玉のようなものが突然降ってきて、そこに彼がいたので、その時他の教師が庇ってとっさに避けた拍子にこんなことに」

「火の玉？」

仁が疑問を抱く。

まさか、この街にも・・・。

仁は一瞬恐怖を覚えた。

それよりも今は目の前にいる患者が優先だと気持ちを切り替えた。

「痛みは酷い？」

「かなり・・・」

勇也が顔を歪め訴える。

「神経を痛めている可能性も考えられます。
念のため明日精密検査しましょうか。
異常がなければそのまま退院できると思います。
痛みも酷いようだし今日は痛み止めを打ちましょう。
効き目が強いと思うので今日はここで安静にした方がいいでしょう」

「そうですか・・・」

顧問が不安そうに言った。

勇也は病室へと移動した。

仁は痛み止めの準備をする。

「効いてくると痛みは和らぐと思うけど、暫く感覚もなくなるから上手く起き上がれなくなるので何かあったらすぐに呼んでください。万が一痛みが酷くなった時もね」

「はい・・・」

勇也に痛み止めが打たれた。

勇也はずっと気になる事があり、さっきから尋ねるタイミングを伺っていた。

仁が去る前に思い切って口にした。

「あの、先生・・・」

「はい？」

「二ヶ月くらい前からここに暮内麗加って患者がいると思うんですけど・・・」

仁は麗加の事は直ぐに分かった。

「あぁ、はい。いますよ。お知り合いですか？」

仁が優しく尋ねる。

「はい。クラスメイトなんです。
ずっと休んでるから元気なのか気になってて・・・」

勇也が少し照れくさそうに言った。

仁は微笑んだ。

「彼女は元気ですよ。
大分良くなりました。
もう少しで退院できると思います。
そしたら温かく迎えてあげて下さい」

「そうですか・・・良かった」

勇也が安心した表情で答えた。

～25～

仁が病室を後にする。

仁の姿が目に止まった麗加は立ち上がり、仁を追いかけた。

「先生！！先生！！」

「暮内さん」

不安げな表情で仁を呼び止め、問う。

「今運ばれて来た・・・人、大丈夫なの？」

「あぁ、彼なら大丈夫だよ。
ただ、ちょっと神経を痛めてるかもしれないから検査入院してもらうことになった。
彼クラスメイトなんだってね」

「え？」

何故仁が知ってるのか疑問を抱いた。

「彼も君の事、心配していたから・・・」

「え、邦鷹君が・・・？」

麗加の頬が少し赤くなった。

その様子を見た仁は薄々と感づく。

「もしかして・・・恋人？」

麗加が思いもよらない仁の言葉に顔を赤くした。

「ち、違う！！違います！！！！そんな！！」

「あはは。痛み止めが効いて眠ってるかもしれないけど、良かったら顔見せに行ってあげなよ」

そういって仁は勇也の病室を教えてくれた。

麗加は緊張と不安な気持ちを抱えて勇也の病室の前へと来ていた。

ノックをしようとする手が躊躇していてなかなかドアを叩けない。

怪我の様子も心配だが、意中の相手に会うという緊張感がどんどん高まってくる。

ドアの前で寸止めした右の拳を左手で掴み、胸の前において深呼吸をした。

勇気を出し小さくトントン！と二回ノックをした。

「あ、はい？」

中から勇也の声がした。

こんなに近くにずっと会いたかった邦鷹君がいるんだ・・・

そう思うと胸が一杯になり、恥ずかしくてドアを開けられなかった。
ここにきて髪は乱れてないかなどと気になってしまい、アタフタしてしまう。
勇也はなかなか開かない扉に疑問を抱く。
「どうぞ？」
再度声をかけられた。
麗加はもう一度深呼吸をし、震える手でドアを開けた。
「失礼します・・・」
そっと顔を覗かせた麗加の顔を見ると、勇也は安心したように笑顔を見せた。
「暮内！！久しぶり！！入れよ！」
「うん・・・」
麗加はよそよそしく病室に入った。
「千風からメールがあって、大怪我したって聞いて、それでさっき先生に聞いたの。その・・・大丈夫？」
包帯が巻かれた右足は固定されており痛々しかった。

「あぁ、今は痛み止めも効いてきたし、大丈夫だよ。ありがとな」
勇夜が笑顔で答えた。
久々に見る勇也の笑顔に、胸がときめいて久しぶりにドキドキしていた。
麗加は勇也のベッドの横に椅子を置き座った。
「暮内も元気そうで安心した！」
優しい表情で勇也が言った。
「ありがとう・・・みんな元気？」
「そうだな。相変わらずだよ。
あ、一人転任の先生が来たんだ。
それが帰国子女で色んな国周ってたらしくて、話もすっげ面白くってさ！
世界史の先生なんだけど、スポーツも万能で今サッカー部のコーチなんだ」
勇也が少し興奮気味に話していた。
「そうなんだ！凄いね！」
麗加も微笑み和やかな雰囲気になった。
「あの先生サッカーも上手くってさ、同じ選手だったら絶対チーム強くなんのになぁ～～！」

「あは、でも邦鷹君だってエースじゃない！十分強いよ！」

麗加が褒めると勇也は照れくさそうな顔をした。

くすくすと笑い声が広がる。

不意に勇也は切り出した。

「実は・・・今日もその先生に、間一髪で助けられたから俺、足の怪我だけで済んだんだ・・・」

「・・・どういう事？何か、あったの？」

勇也の表情が曇っていった。

「うん・・・死ぬかと思った」

「え・・・」

思いもよらない言葉に一変し、嫌な空気が漂った。

～26～

勇也はそこで起きた出来事を麗加に話した。

麗加は恐怖を覚えた。

麗加自身も謎の光の衝撃で大怪我をしている為、勇也の恐怖も理解が出来た。

「あ～、でもなんかこうやって話してると、俺って情けないなぁ」

勇也が苦笑した。

「そんなことないよ！！」

麗加は真顔で叫んだ。

沈黙が走った。

「ごめんなさい・・・でも、無事でよかった・・・ホントに」

今度は涙が出そうになった。

「いや、ごめんな・・・ありがとな・・・」

勇也が微笑んだ。

お互いの素直な気持ちが交差する。

次第に段々と恥ずかしさを増していった。
二人はギクシャクしていた。
「え・・・と・・」
「んぁ～～ごめん・・・なんか麻酔が強くなってきて・・・」
勇也が両手の甲を目に擦り付けながら言った。
「私こそ突然押しかけてごめんなさい。私ももう戻るね」
麗加は慌てて立ち上がった。
「じゃぁ、おやすみなさい」
そう言ってドアの方へと向かった。
「暮内！」
勇也が呼び止める。
ドキン・・・
立ち止まりゆっくり振り向いた。
「またな」
勇也が優しく微笑みながら言った。

「うん。またね」

麗加も笑顔で答え、病室を出た。

勇也はその直後に眠ってしまった。

自室に戻った麗加は、開きっぱなしのメールがあったことを思い出し目を通した。

送り主の千風に勇也に会えた事と知らせてくれたことのお礼を返信した。

勇也の身に起きた事はショックだったが、元気な笑顔を見せてくれたことに嬉しさを隠せなかった。

明日、検査後にもう一度顔を見に行こうと麗加は思った。

～27～

一方、豪はレッドタウンに着いていた。

街は半壊しており、まだ普及も満足にされていなかった。

賢の研究所へと向かう。

散らかってはいたが、地下室はまだ無事に残っていた。

中に入り、戸棚や引き出しなどあらゆるところを調べる。

持ち出せそうなノートパソコンと、数あるメモリーカードなどをかき集めた。

豪は自分が生まれ変わった部屋にも足を運んだ。

自分のプログラムも知る必要があると思い、パソコンの電源を入れた。

電気が通ってないため、非常用バッテリーで作動した。

ファイルを開くと沢山のプログラムが画面に映し出された。

「こんなものが組めるとは、化け物はお前だよ・・・賢」

豪が呟いた。

自身に組まれたスキルや数値などもそこには全て書かれているが、

やはり理解することが出来ない。

豪はそのデーターも一緒に持つことにした。

他にもいける部屋はくまなく回り、それらしいものを集めた。

ある程度かき集め終わると、近くにあったトランクケースに詰め込んだ。

外に出るとすっかり日は暮れていた。

翌日、病院では勇也の精密検査が行われた。

午前中に1時間ほどで終わり、勇也は病室に戻された。

仁の元へは代わりに保護者と学校の顧問が呼び出されていた。

看護婦に聞き、検査を終えて病室に戻っていると知った麗加は勇也のもとへ向かった。

コンコン・・・

「どうぞ・・・」

戸をノックすると勇也の声が返ってきた。

「失礼します」
麗加が戸を開け病室に入った。
「あぁ、暮内。おはよ」
勇也はまたも笑顔で迎えてくれた。
「おはよ。検査終わったんだって？お疲れ様」
「うん・・・」
だがどことなく元気がない様子に麗加は気がついた。
「結果・・は・・・？」
気遣いながらも問いかけた。
「今親と先生が聞いてる」
「そっか・・・」
益々元気をなくす様子の勇也に麗加は戸惑った。
心配にはなるがかける言葉が見つからない。
部屋に沈黙が走った。
少しすると勇也が口を開いた。

「俺・・・もしかしたらもう、サッカー出来ないかも知れない」

～28～

「え・・・今なんて・・・」

診察室では勇也の母親が言葉を失いそうになっていた。

「精密検査の結果、膝半月板損傷との診断結果が出ました。
手術をすれば回復は望めます。
ただ彼の場合、普段行っているサッカーで既に痛めていた可能性が高く、昨日のとっさの衝撃で激しくひねり損傷したものと考えられます。
このままだと日常生活にも車椅子が必須になります。
リハビリを重ねて歩行が可能になったとしても、残念ながら選手生命を絶たれる可能性が高いです。」

「そんな・・・」

母親はショックで涙を流していた。

「すみません。私の責任です。確かに、邦鷹は度々膝を気にしていました・・・まさかこんな事に・・・」

顧問教師は頭を抱え俯いた。

勇也の思いがけない発言に麗加は思わず固まる。

「だっ・・・て、結果・・・まだなんでしょ？そんな・・・分からないよ」

「俺さ、ホントは前から膝、痛めてたんだ。
だけど試合が近かったからさ、黙ってて・・・
けどこの怪我でもう、駄目なんじゃないかってさ、分かるんだ。
本人じゃなくて、親が呼び出されてるのだってそう言うことだろ？」

勇也は膝を見ながら悔しそうな顔をし、唇をかみしめていた。

「でもさ、手術すれば・・・今は人工・・・」

そう言いかけて麗加は言葉に詰まった。

以前、授業で自分には必要ないと発言したことを思い出す。

その日の帰りのロッカーで勇也に会い、言われた言葉が頭を過ぎった。

『俺もかっこいいと思うよ・・・英雄みたいじゃん！』

あの時きっと勇也も麗加と同じ考えを抱いたのだろう。

「ごめんなさい・・・」

麗加は軽はずみな言動をしたことを後悔した。

「いや、出来ればさ、続けられるならそれでも良いんだ。
けど・・・俺の怪我、人工器具使ったら多分、もうプロは目指せ

なくなる」

科学が発達し、機械による補助で怪我や病気を治療できるようにはなった。

しかし、その機能が機械によるものの場合スポーツ界では規定が設けられてしまう。

そうなるとプロ選手の道は花が咲かないまま絶たれる事になる。

勇也は幼い頃からプロを夢見てサッカーを続けてきており、県代表候補とまで言われていた。

築き上げてきたものが壊れかけている。

「なんかごめんな、せっかく久しぶりに会えたのに、俺すっげーカッコ悪いとこばっか見せてるな・・・」

勇也は麗加と目を合わせなかった。

一人になりたいのだと察した。

「私で力になれることがあったら遠慮なく言ってね」

「ごめんな・・・」

力なく勇也が謝った。

麗加は何もしてあげられないもどかしさを噛みしめながら病室を出た。

静かに戸が閉まると、勇也は声を殺して悔し涙を流していた。

～29～

麗加は自室に戻った。

自分が想っている人が弱っているところを目の当たりにしてしまった。

「力になんてなれないのに・・・」

あんなことしか言えなかった自分に嫌悪感を抱いた。

落ち込んでいると、誰かが戸をノックした。

コンコン

「はい」

戸が開くとそこには仁がいた。

検診にやってきたのだった。

「気分はどう？」

「大丈夫です」

笑って見せる麗加だが、元気がないのは仁にも伝わった。

「あぁ・・・採血が億劫・・なのかな？」

「あはは」

仁の問いに麗加は思わず笑った。

何となく勇也のことなんだろうと仁は感じていたが、話題には出さない。

それよりも仁は前の精密検査の時に気になった数値を調べて、そのことで麗加に伝える事があった。

採血が終わり一通りの検診が終わると仁は切り出した。

「一つ報告しておかなければいけないことがあって・・・」

仁は麗加のベッドの横に椅子を置き座った。

「前に精密検査をしたときに、異常がないと報告をしたのだけどね。一つ気になる数値があったんでそれを調べたんだ」

「異常だったって・・・こと？」

「いや、定期検査のときは異常が見られないんだ。だから問題はないんだと思う。ただ、ある時にだけ異常値を出していたんだ・・・」

仁自身も確証がない事だったので言いにくそうにしていた。

麗加は黙って耳を傾けていた。

「異常値が出たのは、最初に運び込まれた時と、以前君が僕と弟の

話を聞いて飛び出した時と、精密検査の時のその3回だけなんだ。
1回目の時は君も言っていたようにイエロータウンでの時で、2回目も君はあの・・・不思議な力を使っている。
3回目の時は若干数値は下がっていたけど、精密検査の前にも使った覚えはある？」

麗加は思い返していた。

そういえば、精密検査の数日前に初めて豪に会った時に、力を使った。

「先生、それが何か関係するの？」

答えを言わなかったが使ったものだと仁は判断した。

「あの力、もう使ってはいけない。
君の体に大きな負担がかかっているのは間違いない。
一時的に君は危険な状態に陥る。
時間が経てば回復しているけど、もし大きな力を使えば・・・君の命が危なくなる。」

仁に言われ、麗加自身もどことなく体への負担は感じていた。

激しい頭痛がした事もある。

「あの力は制御は出来る？」

「分からない・・・けど、何も起きなければ大丈夫だと思う・・・」

麗加は下を向いて力なく答えた。

しかしそれは麗加の企みを悟られない為にわざと顔を伏せたのだ。

「そう・・・。じゃぁ出来るだけ使わないようにした方がいい。いいね。」

「はい・・・」

仁は微笑みながら頷き、病室を後にした。

しかしどこか不安な気持ちは拭い去れないでいた。

～30～

麗加は仁が去ったのを確認すると、Ｅ－ｎｏｔｅを開き日記を書き始めた。

何かを決意したかの様な眼差しでキーを必死に叩いていた。

「邦鷹君を・・・救ってあげられる」

麗加は勇也の為に使える力がある事に気づき、ある決心を固めていた。

仁が言うもしもの時の為に自分の意志を残すため日記に書き込み保存した。

しかし、勇也の目の前で力を使う訳にはいかない。

仁にバレれば何らかの方法で止められてしまう。

離れた場所からでも力を使うことが出来ないだろうか・・・。

麗加は願うように勇也の元へ意識を集中させてみる。

しかし、この力を自分でコントロールしたことが一度もないため上手く出来なかった。

「出来ない・・・どうすれば良いのよ」

麗加は苛立ちを覚えた。

やっぱり無理なんだ。
そう思うと悔しくて涙が出そうになった。
勇也の悔しそうな顔が脳裏に蘇る。
使ってはいけないといわれた自分の力。
でも、何故自分がそんな力を秘めていたのか。
それは自分に必要な力だったから以外に理由はないだろう。
麗加は諦めなかった。
「思い出せ・・・感覚を」
再び集中を始めた。

昼が過ぎた頃、豪は賢の部屋に戻ってきた。
ベッドに設置された机の上にトランクケースを置いた。
「とりあえずノートパソコンとメモリーカードをかき集めてきた。これでいいか？」
賢はケースを開け中を確認した。

「多分この中に手がかりになるデータがいくつかあるはずだ。悪いな・・・随分手こずらせてしまって」

豪がほぼ1日帰ってこなかったことに賢は心配して待っていたのだった。

「これらは直ぐに見つかった。遅くなって悪かったな。別の場所にも立ち寄っていた」

「もしかして・・・イエロータウン？」

豪はあの後、イエロータウンにも足を運んでいた。

レッドタウンよりも酷い被害にあったその街はまるで廃墟だった。

街人の姿もなく、どこまでも広がるのは瓦礫だけだった。

豪は生まれ変わってから初めてこの地を訪れた。

かつて自分が住んでいた跡地に向かう。

両親を亡くしてから兄弟で力をあわせて暮していた温かいあの頃の姿はどこにもなかった。

幼い弟たちの笑顔が蘇ってくる。

そして、一人の少女の優しい笑顔が浮かんだ。

豪の目から静かに涙が流れた。

「まだ、涙は出るんだな・・・」

自分の涙に気がつくとその場に膝をつき、地面を拳で強く殴った。

その瞬間豪の目つきは復習の決意の目に変わったのだった。

～31～

そんな昨夜のことを少し思い出し豪は黙り込んでしまった。

賢は豪の様子を静かに見ていた。

豪は我に返り再び口を開いた。

「イエロータウンの研究所にも行ってみた。だがやはり何も残っていなかった」

その一言だけを賢に伝えた。

「そうか・・・ありがとう」

その時病室の戸をノックする音がした。

コンコン・・・

「失礼するよ」

入ってきたのは仁だった。

「おかえり、豪」

「あぁ」

賢はノートパソコンの電源を立ち上げキーを素早くはじき出し始めた。

「データがあったのか」

仁が問う。

「データは単体で使えないようにそれぞれ分散して保存がしてある。だからそれをまとめる必要があるんだ」

賢が画面に視線を向けたまま答えた。

暫くパソコンを操作していた賢の手が止まった。

「駄目だ・・・一台だけではとても容量が足りない・・・」

画面にはメモリー不足のエラーが出ていた。

ノートパソコンにA－D2Xのデータをまとめることはとても出来そうにない。

「うちにあるものを集めれば出来そうか？」

仁は院内のパソコンを提供しようとしていた。

「プログラムを組み直さなければならなくなるけど、出来るなら集めて欲しい」

賢が答えた。

「あと、研究所のシステムはまだ稼動した？」

豪に問う。

「街には電気は通っていなかったが、稼動した」

「そうか、ハードが使えれば何とかなりそうだ。悪い豪、もう一度研究所に行ってメインハードを運んで来て欲しい」

賢は接続部分などを説明し、運び込む部分を指示した。

「よし、それなら俺が車を出そう」

「ありがとう兄さん。僕はデータを参照して準備を進めておくよ。よろしく頼みます」

「分かった。だが賢、無理はするな。お前の体はまだ万全な状態じゃないんだからな」

仁は賢にそう言うと病室を出た。

豪と共に廊下を歩いていると助手の真純が慌ててかけて来た。

「仁先生！！！」

「どうした！？」

真純の様子から急患が出たと悟る。

「邦鷹さんが、突然痛みを訴え暴れだしてしまって・・・」

「それで！？」

「今痛み止めと鎮静剤を投与して落ち着いたんですが、どうしても先生に聞きたい事があると・・・」

仁は真純に状況を聞き、勇也を優先することにした。

「悪い豪、少し時間をくれ」

「あぁ・・」

豪に断りを得て仁は勇也のもとへ駆けつけた。

病室に入ると勇也は落ち着いて横になっていた。

視線はボーっと天井に向けたまま、表情も変えずに時折瞬きだけをしている。

そっとベッドに近づくと勇也は静かに口を開いた。

「先生・・・」

仁は黙って勇也の声に耳を傾けていた。

「俺・・・手術したら、もう・・・無理なんだよな」

勇也は今まで築きあげてきたものを全て失いかけており、奈落の底に落ちてしまったかのように絶望している。

「なるべく最良の方法を検討します。まだ・・・諦めるのは、早いよ」

仁が言葉を選んでいるのが分かり、勇也は唇をかみしめている。

「自分にとって大切なもの、信じてたものを失うかもしれない、気持ちは分かるつもりです」

一見気休めの言葉のようだったが、仁はその言葉に何かを込めている様なそんな表情をしている。

しかし今の勇也にはそこまで悟る余裕はなかった。

弱った自分を隠すかのように顔を更に背けた。

「俺・・・怖いんだ。当たり前だった物がなくなる人生なんて・・・考えられねぇよ」

そう言う勇也の声は震えていた。

自分の未来を揺るがす出来事にかなり怯えている。

仁はそっと勇也の肩に触れた。

勇也は一度鼻をすすり言った。

「クソ・・かっこ悪すぎるや・・・せんせ・・暮内には・・・言わないでくれ・・・」

こんな自分を知られたくないと、勇也は仁に口止めをしていた。

声が弱くなったと思うと、麻酔が効いたせいで勇也は眠りについていた。

仁は掛け布団を正し、静かに病室を後にした。

廊下に出るとふと物思いに耽る。

遠い昔を思い出したような・・・どこか切なげな表情になっていた。

そんな仁を静かに見ている豪の姿があった。

豪に気がつくと仁は気持ちを切り替える。

「待たせたな。行こう」

二人はレッドタウンへと出発した。

～32～

とある一室では異様な雰囲気を漂わせていた。

麗加の病室である。

精神を集中させ目を閉じる麗加の掌からは優しい光が溢れていた。

麗加は自身の力をコントロールし、引き出すことが出来たのだ。

しばらくすると麗加の集中が切れ、光もすぅ～っと消えていってしまった。

「はぁ・・・はぁ・・・やっぱり駄目だ・・・」

眉をひそめ悔しそうな顔をして呟いた。

力を引き出すことは出来ても、離れた場所に送ることはどうしても出来なかった。

出来れば誰にも見られない形でこの力を使いたかったのだ。

もちろん勇也の足の治療のためである。

麗加はこの場ではどうにも出来ないと諦め、勇也の病室まで訪れることにした。

仁に見つからないように、そして勇也にも気づかれないように何とか出来るかもしれない。

麗加はベッドから足を下ろした。

「あっ！！」

思わず体制を崩してベッドからずり落ち、床に膝をつく。

思った以上に体に負担になっていたのだ。

しかし麗加は気を取り直してしっかりと立ち上がると病室を出た。

勇也の病室を目指す。

目前まで来た時勇也の病室から一人の看護婦が出てきた。

「あ、あの・・・」

麗加は声をかけた。

「邦鷹君は・・・」

「邦鷹さん、今麻酔が効いて眠っていますよ。」

「麻酔？」

麗加は思わず驚いた。

「痛みが酷かったみたいで、痛み止めを・・・ね。」

「そうですか・・・」

勇也の状態は深刻なのだと察した。

一刻も早く治療してあげたい・・・。

「あ、仁先生は・・・？」

念のために聞いてみる。

「今日は上がられましたよ。弟さんの急用とかで・・・」

仁はいない。

それを聞いて麗加は絶好のチャンスだと思った。

「仁先生に何か・・・？」

黙り込んだ麗加に看護婦が疑問を抱き問いかける。

「いえ、ありがとうございます。」

お礼を言いお辞儀をすると、看護婦は会釈をしてその場を後にした。

麗加は少し辺りを見渡し、勇也の病室のドアをゆっくり開けた。

そっと中に入る。

そこでは静かな寝息を立てて眠る勇也の姿があった。

音を立てないようにそっと二、三歩近づく。

勇也の寝顔に目をやると麗加の胸はギュッと痛んだ。

自分が知っているキラキラした彼の姿はそこにはなく、苦しそうな、辛そうな表情で目の周りがほんのり赤くなっている。

胸が張り裂ける想いだったが、気づかれないうちに済ませなければと麗加は痛々しい勇也の足元に移動した。

目を閉じ、意識を集中させる。

やがて優しい光が麗加から溢れ出した。

より多く、より強く、力を勇也の負傷した足へと送り込む。

それはわずか数分の事であったが、麗加にはとても長く感じた。

想い、力、自分の中の全てをそこに与えた。

フッと光が消えると、重いため息を一つ吐いた。

麗加はもう一度勇也の寝顔に目を向けた。

心なしか表情が柔らかくなっているように見えた。

安心した麗加は気づかれないようにそっとその場を後にした。

～33～

静かに扉を閉め、ほっと一息つくと自室に足を向ける。

麗加は毅然とし、すれ違う人間に違和感を持たせなかったがその足はどこか急ぎ足だった。

自室に近づくにつれその歩調は早まり、何かに焦るような、何かを隠すようなそんな面持ちになった。

自室の戸を開け駆け込むように中に入るとダルそうに戸にもたれ掛かる。

その勢いで戸がバタンと閉まった。

「っぅ！！！！」

突然麗加の頭部に激しい痛みが走り、麗加は頭を押さえ込んだ。

みるみる顔色を悪くし、尋常ではない量の汗が流れ出す。

「ぁっ・・・あぁ！！」

痛みに叫び倒れ込み、苦しい表情を浮かべもがくと、そのまま麗加は意識を失った。

「暮・・内？」

朦朧とする意識の中でリアルに麗加の気配を感じ、そう言葉に発して勇也は目を覚ました。

夢だったのか・・・そう思って再び目を閉じた勇也だったが、『違和感』に気付き再び目を開き体を起こす。

そしてその『違和感』を恐る恐る確かめてみる。

「夢・・・なのか・・？」

勇也は自分の身に起きた『違和感』に驚きを隠せず、何があったのかただ唖然とするばかりだった。

日もすっかり落ち、レッドタウンに発った豪と仁は賢の指示通りのメインハードを運び出していた。

「これで全部か」

豪が最後の一つを運び出し車に積む。

仁は終始、街の有様に圧倒されっぱなしだった。

想像以上の絶大な光景に、改めて恐怖感を覚えていた。

言葉一つ発することの出来ない仁を豪は冷静な面持ちで見ていた。

「仁！」

唖然としている仁に豪は声をかける。

仁ははっ！とし振り返る。

「全て運び込んだ」

豪は顔を車に向け仁に伝えた。

「あぁ、ありがとう・・・戻ろうか」

そう言って仁が車の方へと歩み寄った時・・・

RURURURURU・・・

RURURURURU・・・

仁の携帯電話が忙しく鳴った。

着信元は病院からだ。

「はい、仁です」

待ちぼうけを喰らった豪はフッとため息をつき、先に車に乗り込も

うとした。

「なんだって??どういう事だ!!?」

いきなり声を荒げた仁に豪は足を止め振り返る。

「とにかく、すぐに戻る!」

尋常じゃない仁の慌て様に緊急事態が起こったんだろうと豪は察した。

仁は車に駆け込んで来た。

同時に豪も車に乗り込んだ。

「急患か?」

豪が尋ねた。

仁は車を起動させながら複雑な表情を浮かべている。

「悪いが急いで戻る・・・」

そう言ってアクセルを全快に踏み込むとけたたましいモーター音を響かせた。

仁が向かうその先ではパニックな騒動が起きていた。

「大丈夫なんだよ!!何ともないんだよ!!」

「邦鷹さん落ち着いて！駄目です！安静にしててください！！」

暴れる患者を必死に止める看護婦。

そんな光景が繰り広げられていた。

絶対安静だった勇也が損傷を受けた足で立ち上がっているのだ。

そして重症のはずの足を気遣うこともなく平然とした言葉を発している。

先ほどまで痛みに苦しんだとは思えない事態に医師たちも戸惑いを隠せないでいた。

「何なんだよ！！俺の足おかしくなっちまったのかよ！！」

勇夜自身が一番混乱している。

程なくして知らせを受けた仁が勇也の病室に駆け込んできた。

しっかりと地に立つ勇夜の姿に仁は目を疑い言葉を失う。

仁が来た事に気づくと勇夜は仁に近づき、仁の腕を力強く掴んだ。

「先生！俺、足おかしくなっちまったのか！？痛みも何も感じないんだよ。痛くねぇんだよ・・・」

勇夜はその場に泣き崩れてしまった。

仁は勇夜の肩に手を置き一言だけ言った。

「君の足は大丈夫だ！」

「・・・？」

断言するように言われ、疑問顔を浮かべる勇夜。

「悪い、他にも急患がいる。彼には鎮静剤を・・・落ち着いたら検査する」

そう看護婦らに告げ、仁は足早に勇夜の病室を去ってしまった。

～34～

仁が気を焦らせたのは勇夜ではなく他の患者だったのだ。

「駄目だって言ったのに！！」

険しい表情でとある患者の元へ駆けつけていった。

扉を勢いよく開ける。

そこではすでに数名の医師達により救急処置に取り掛かっていたが慌しかった。

ベッドに横たわり顔色を悪くしている麗加が今にも息絶えそうになっている。

「容態は！？」

「心拍数、脈、呼吸全て安定しません！」

「いつからなんだ！？」

「発見したのは３０分ほど前です！」

仁は勇夜の姿を見た時に麗加が約束を破ったと実感させられていたのだ。

力を使った・・・。

しかも一度に大きなエネルギーを。
それは麗加の生命に関わる。
「暮内さん！しっかりするんだ！！！」
仁が麗加に必死に声をかける。
「彼は救われた！だけど君が死んでしまったら意味がないじゃないか！！」
勇夜が無事・・・
そう聞き一瞬安心した表情を浮かべた直後、けたたましい機械音が響いた。
ピピピピ！
ピピピピ！
「先生！！」
ピーーーーーーーーーー！
心拍数がゼロを表示させる。

麗加の手が力なくベッドの脇からスッと零れた。

必死に心臓マッサージを始めた仁だが、麗加の呼吸は二度と戻ることはなかった。

落胆の色に染まる病室。

急に静まり返った。

仁は無念で仕方がなかった。

麗加が死んだ。

～35～

今まで沢山の患者を見てきた。

そして沢山の死を見てきた。

だが麗加の死を仁はまだ受け入れられないでいた。

不思議な力を持つ謎の少女。

まだ彼女は生きている・・・なぜかそんな風に感じて仕方がなかった。

しばらく仁は一人呆然としていた。

主を失った一室。

そこに姿を現したのは豪だった。

麗加の死を知り、どうしても解きたい謎があったのだ。

『あのっ！』

以前少し息を切らしながらかけてきた麗加の姿が浮かぶ。

『私分からないの。自分がどうしたいのか。だからもう一度あなたに会って話したかったの』

『お前が今、俺に話しかける行動をした。それがもう答えだ』

『え？』

そんなやり取りをしたのを思い出す。

「お前は、答えを見つけることが出来たか？あっけなく逝ってしまって後悔はないのか？」

豪は静かに呟いた。

そのままにされている麗加の私物を何気なく見渡す。

その中に一つだけ妙に引き寄せられるものを発見した。

麗加のＥ－ｎｏｔｅだった。

豪はその機械から発せられる何かを感じ取り手帳を開いてみた。

手帳には麗加の今日までの日記が書かれていた。

真新しい今日の日記のタイトルには「私の答え」とある。

豪は迷いなくその日記を開いた。

～私の答え～
今私に出来ることは、大事な人を守ること。
だから私、彼のために自分に出来ることをやりたい。
この力を彼に使う。
彼の悲しむ顔を見たくない。
でも、この力を使うと先生が言ってたように私は死ぬかもしれない。
それで私が死んだらそれまで。
だけど、もし私がそれでも生きられるのなら、もっと大きな事が出来るのかな。
私にも出来るのかな。
家族を失った同じ境遇のあの青年みたいに・・・
私が死んでしまったら、もう間に合わないかもしれないけど、私も志願したい。
まだ守りたいものが沢山あるから。

麗加の答えは出ていた。

しかし麗加は死んでしまった。

だがあの二人の力があればまだ間に合うかもしれない。

豪は手帳を持ち二人の元へと急いだ。

仁は賢の病室にいた。

「今日患者が一人死んだ。今までこんな気持ちになったことなんかなかったんだけどな。あの子にはもっと生きてほしかった」

賢に胸の内を語っていた。

そこへ豪が慌ててやってきた。

「豪！・・・一体どうしたんだ？」

珍しい様子に賢が少々戸惑いながら問う。

「二人に頼みたいことがある」

豪はそう言って早速麗加の「答え」を二人に見せた。

そして麗加の想いを二人に伝えた。

～イメージ画～

ここまで読んでくださいまして誠にありがとうございます。

未熟なりにも知恵を絞り苦悩しながら書き続けてまいりました。

まだまだ書き足らないことも沢山ありこの物語は続きますが、もし楽しみにしてくださっている方がおられましたら長い目で見守ってやってくださると幸いです。

個人的に落書きも趣味としており何枚かのイメージ画を描いたのでこのページに載せてみました。

下手くそではありますがどうぞお楽しみいただければ幸いです。

>i14514_2016<

>i14542_2016<

>i14526_2016<

>i14523_2016<

>i14524_2016<

>i14517_2016<

>i14518_2016<

それでは引き続きお楽しみください。

～01～

「ブラフマーが死んだ。そして蘇る」

街が深い闇に染まった頃、一つの人影がふっと囁いた。

長い間光を失っていた一室が、ここ数ヶ月の間眩い光を取り戻している。

関係者さえもその存在を知らされていないその空間に妙な忙しさがあった。

「あと、どれくらいで終わる？」

一人の男が問う。

パソコンの画面を覗き込み残りの時間を確認した女が、後ろに束ねた髪を揺らし振り向く。

「あと15分で転送完了です」

「これが終われば完成だな」

別の男がその完成品を見ながら疲労と達成の色を浮かべた。

そこにいる三人が肩を並べる。

その顔ぶれは良く知る者たちだった。

田神仁、田神賢、そして仁の助手青木真純だ。

ここは田神総合病院の一室。

だが、ここを知る者は病院関係者でも殆どいない。

奥深く閉ざされた密室で間もなく終わろうとしているのはある計画の一部であった。

仁が少し記憶を戻し、頭の中に呼び起こした。

あれは、そう。

一人の少女が死んだ日・・・。

「二人に頼みたいことがある」

仁と賢の元に慌てた様子で現れた豪から思わぬ発言が出た。

「あいつを、暮内麗加を俺と同じサイボーグにして欲しい」

仁と賢は返事に躊躇い言葉を失った。

考える間もなく豪から差し出されたＥ－ｎｏｔｅの画面を見せられた。

そこには麗加のあの日記が表示されていた。

二人はその内容に目を通した。

読み終えた賢が浮かない表情をする。

「ダメだ。僕には出来ない。彼女は死んでしまったんだ。これが彼女の意思だとしても、もう人間の体を改造する事なんて・・・」

賢は更なる罪を犯す事も、科学の才能を活かす事も恐れていた。

これ以上何が起こってしまうか、勝手ながら考えるのも嫌になっていたのだ。

そんな姿に豪は再び怒りを覚え、賢の胸座を掴んで引き寄せた。

「テメーでしたことを中途半端に投げ捨てるのか？テメーの罪はもう許されないんだ。ここまで来たらとことん罪を犯してもらう。この程度で簡単な処刑で済むと思うな！」

興奮する豪を仁が止めた。

「豪、落ち着くんだ。君はどうしてそこまで彼女の事に拘るんだ？」

豪は少し落ち着きを取り戻した。

「あいつは、俺と同じなんだ。あいつは、不思議な力を秘めていた」

「知っていたのか」

仁が言う。

「俺の事も全て話した。あいつは悩んでいたが、俺と同じ答えを出したんだ」

麗加と接触した日々を思い返す。

「けど・・・」

賢がそれでも首を縦に振らないでいると、そこに一人の女性医師が駆け込んできた。

「先生！仁先生！！」

血相を掻いて慌てているのは真純だった。

「どうした？君が来るなんて、何があったんだ？！」

「それが・・・」

真純は息を整え、飛んできた訳を語り始めた。

身寄りのない麗加が死に、遺体安置所へと運ばれる際に真純が付き添った。

その場に麗加を残し部屋を出ようとした真純は、仁が気にかけていた患者だった為足を止めその場に留まった。

そしてもう一度部屋に戻り、麗加の元へと歩み寄る。

二度と目覚めることのない遺体をじっと見つめ、静かに目を閉じ手を合わせた。

数秒のちそっと目を開く。

真純はその時再び目を向けた遺体に違和感を覚えたのだ。

とても死んだ者とは思えない血色の良さがあるように見える。

部屋の明かりのせいかとも思ったが、明かりといっても薄暗い為むしろ血色が良く見えるほうがおかしいのだ。

しばらく様子を伺っていると、やがてその疑惑は確信へと変わるのだった。

麗加の体が淡い光を放ち、そしてその体を包み込んでいく。

信じられない現象が起こり始め、真純は息を呑んだ。

その現象はどんどん増していき、驚いた真純は慌てて仁の元へと向かったのだ。

～02～

話を聞いた仁は麗加の元へ向かい、真純も後を追う。

暗がりの廊下を突き進み安置所の前に来ると、仁もその信じがたい光景を目の当たりにした。

しっかりと閉められた戸の隙間から室内の明かりがこぼれている。

それは部屋の明かりとは別の発光があるとしか思えないものであった。

立ち止まっていた仁は静かに扉へと近づく。

そしてそっと部屋の戸を開けた。

発光の元手を目撃した仁は大きく目を見開き硬直してしまった。

そこに眠る麗加の体は大きな淡い光に包み込まれていた。

その光は麗加の体に無数に絡み付いている。

優しく、丁寧に、労わり、癒す。

まるでそれは蘇生しているかのように・・・。

少し遅れて車椅子に乗った賢を連れ、豪がかけつけた。

その場に佇む四人はその光景を静かに見守っていた。

麗加は、今もなお生きている。
決して戻ることのない鼓動を再び得ようとその身を滅ぼさぬよう、
あの力で自身を守っている。
その姿をじっと見つめていた賢の目が変わった。
「皆・・・僕に力を貸してください」
そう発言した賢の方を見た仁は力強く頷いた。
田神兄弟の極秘プロジェクトの始まりであった。
事情を知った真純もプロジェクトに加わった。
かつて仁に救われた真純はどんな事があっても仁の力になるという
強い意志を持っていた。
病院と両立させるためにも真純が上手く協力し、麗加再生の時を迎
えることとなった。

仁の回想も終わる頃、一つの電子音が鳴り響く。
三人は完成品に目を向けた。

パソコンの画面には「Ｔｒａｎｓｆｅｒ　ｃｏｍｐｌｅｔｉｏｎ！（転送完了）」の文字が表示されている。

真純がマウスを動かし、ポインタを「ＯＫ」のボタンに合わせた。

「起動開始します！」

そう言うとマウスをカチッとクリックした。

キューーーーーーーーン！！

高い電子音が鳴り、完成品が起動する。

それはゆっくりと目を開いた。

電源により青く光る瞳は次第に茶系の瞳へと落ち着く。

静かに起き上がり床に足を着いて立ち上がった。

「君の名前は？」

仁が問うと、それは仁に目を合わせ口を開く。

「私ハ、暮ナイ・・・レイ加」

それは表情一つ変えず機械的に、問いに正確に答えた。

三人は安堵の笑みを浮かべる。

容姿は以前の麗加と変わらず、誰が見ても人間である。
皮膚をそのまま移植したことで肌質は保たれた。
だがその皮一枚を捲るとその身は人工素材の塊なのである。
臓器は麗加の死の際に殆どが壊死したため、人工臓器が導入された。
脳にも損傷があったため、麗加の運動・知覚、感情・情緒・理性などさまざまな情報をデータに起こし、チップに全てのデータを転送した。
こうして田神兄弟による医学と科学の力で麗加は蘇りを果たした。

～03～

丁度その時部屋の戸が開き、一人の青年が現れた。

麗加の再生を知った豪だ。

「上手くいったようだな」

豪が麗加の元へと近づく。

麗加は豪の方へ目を向けた。

「アナ方ハ、タン波ゴウ。私ヲ・・助ケテクレタ。・・・アリガトウ」

「礼ならこの二人に言うんだな。俺はただ、お前の意志を無駄にしたくなかっただけだ」

麗加は仁と賢の方を向くと静かに頭を下げる。

仁と賢は少し複雑な気持ちを覚えた。

「ところで、こいつは何型になるんだ？」

唐突に豪が賢に問う。

自分やＡ－Ｄ２Ｘ型にもタイプがあるように、麗加のタイプを尋ねた。

「彼女のタイプはＣ－Ｍ２Ｘ型（ｃｙｂｅｒｇ　ｍｉｄｆｉｌｄｅｒ）で攻守両面型。スポーツに例えて中衛の存在だ」

「どちらにも対応出来るタイプか。なぜこいつも俺と同じＡタイプにしなかったんだ？」

「豪には攻撃を重点においた分防御力に優れていない。Ａ－Ｄ２Ｘ型は防御に優れ反撃力も兼ね備えている。もし二人ともが反撃を食らったらおそらく勝ち目はない。彼女にはそこをカバーする力をおく必要がある」

「フン。まぁ、その力を発揮する間もないと思うがな。俺が一瞬でぶち壊してやる。両面型にした分力が半減して足手まといなんてことにならなきゃいいがな」

豪が嫌味っぽく笑みを浮かべた。

その間も麗加は顔色ひとつ変えずにその場に止まっている。

そんな麗加の様子をその場にいた誰もが気にかける。

しばらくの沈黙を仁が破った。

「二人にはそれぞれ部屋を用意してるから、今後はそこで生活をしてくれ。それと、平日の日中は学校に通ってもらう。必要ないかもしれないが二人は「１７歳の高校生」だ、一番無難に外に出られる口実になる仮の姿として。麗加は復学、豪は編入の形で手続きをしておくよ」

何年が経っても少年犯罪が絶えない世の中が続き警察の目も厳しく

なっている。
日中出歩き捕まったりすると面倒なことになる可能性がある事を考えた。
「了解した」
豪が返事を返した。
「リョウ解」
麗加も機械的に言葉を返す。
豪と麗加はそれぞれ部屋に向かいその場を去った。
二人が戸の向こうに消えると三人は複雑な表情を浮かべて見送っていた。
「彼女・・・まるで感情がありませんね」
真純が心配そうに言う。
「プログラムはプログラムでしかないんだ・・・」
賢が悲しそうに呟いた。
部屋に向かい並んで歩く豪と麗加。

淡々と真っ直ぐ前を向いて歩いていく麗加を豪が横目で見る。
豪は足を止め麗加に声をかけた。
「おい」
数歩進んだところで足を止め、麗加が振り返る。
それは相変わらず無表情なものだった。
「それではただの人形だぞ。お前には人間らしい部分は残っていないのか」
「私ノ中ニハ「暮内麗加」ノ情報ガインストールサレテイル」
豪の問いに機械的に答える。
「そんな違和感丸出しで学校なんかに通えると思うのか。感情はないのか」
「カン・・・ジョウ」
麗加はしばし黙り込んだ。
人間らしい考える素振りではなく、視線を動かさずそのまま動かない。
チップに埋め込まれた膨大な麗加の情報から検索している。

その姿は機械でしかなかった。

しばらくすると麗加は口を開く。

「沢山ノ感情ガアル。嬉シイ、会イタイ、辛イ、悲シイ、好キ、怖イ、怒リ、幸セ、不安、切ナイ」

豪はフッとため息をついた。

「質問を変えよう。どうだ、蘇った気分は」

麗加は再び黙り込んだ。

先ほどより短い時間で口を開く。

「・・・分カラナイ」

意外な答えに豪は一瞬言葉を失う。

生前に残した麗加の想い。

あれは強い意志だったはず。

まさかと思い豪は問う。

「後悔・・・してるのか？」

再び目を覚ましたことに少しも喜びを見せない。

麗加が望んだことだった。

だから豪はその想いを無駄にしなかった。
今更気が変わったなどと言われては困る。
麗加が静かに口を開いた。
「後悔・・・ソノ気持チハナイ。貴方ニハ感謝シテイル。私ニハマダ失ッテイナイ大切ナモノガアル。守レルモノガアル」
そうは言うが、ちっとも嬉しそうな顔を見せないのだ。
いくらサイボーグと言えども感情は理解している。
表情を作れないはずはなかった。
「タダ・・・」
豪が麗加の行動を理解できないでいると続けて麗加が口にした。
「私ハモウ・・・人間デハナイ。ソウ強イ気持チガアル」
「・・・」
豪は言葉を失ってしまった。
麗加は終始無表情のまま再び歩き出し、部屋へと入っていってしまった。
麗加の思考には複雑な想いが秘められていた。

～04～

三日が過ぎ、豪はブルータウンの高校へ編入生として登校する。

麗加とはいとこ同士という事にし、身寄りのない者同士知り合いの家で生活している事になっている。

朝会に合わせ職員室から担任と共に教室へ向かった。

肩を並べて歩く二人の空気は和やかなものだった。

「暮内さんは元気にしてる？」

担任が豪に問う。

「はい、すっかり回復して今は退院して知り合いのところで一緒にいます」

豪は優しい表情で答えた。

今までの冷たく鋭い豪とはまったく違う。

これも孤立して浮かないようにするための策略である。

「彼女が無事で本当に良かったわ。二人とも災難で大変だったでしょうけど・・・暮内さんももうすぐ出てこられるし。クラスの皆には簡単にではあるけど話してあるから、君も無理に打ち解けようとしなくて大丈夫だから。でもとっても明るいクラスよ。友達もすぐ出来ると思うわ」

笑顔でこちらを向いた担任に対し、豪も笑顔を返した。

「さぁ、ここよ」

二人は教室の前へとやってきた。

豪は麗加と同じクラスになった。

クラスには麗加の友達の千風、美兎、意中の相手勇也がいる。

戸の向こうからはガヤガヤと今日も騒がしい生徒たちの声が聞こえてくる。

担任は戸を開け、教室へと入っていく。

「はーい！皆おはよう！今日は皆に嬉しいお知らせが二つあります」

「何？センセー」

クラス中が注目をした。

「まずは、今日から新しい仲間が増えます。どうぞ、入って」

そう言われ、豪は教室へと入った。

豪の姿にソワソワと反応したのは女子たちだった。

豪は担任の横に立つ。

「丹波豪です。よろしく」

一言告げ、軽く頭を下げた。

「ちょっ！！超イケメンじゃん！！！！」

大きく反応し、小声ながらも興奮しながら美兎に言ったのは千風だ。

千風にはまさに理想のタイプだったのだ。

「皆、彼の分からないことは色々と教えてあげてね」

「はぁーい！」

手を挙げ元気よく声を上げたのは千風だった。

「それじゃぁ、あそこの空いてる席へ着いてくれる？」

「はい」

担任が指した席へ豪は向かった。

荷物を机に降ろし、椅子を引くと隣の席の男子生徒と目が合う。

「よろしく！」

男子生徒は笑顔で豪に言った。

席に着いた豪も笑顔で返す。

「よろしく！」

豪は勇也の隣の席になった。

着席した豪を確認すると、担任は続けた。

「それからもう一つは、長い間休学中だった暮内さんが間もなく復学することが決まりました」

そう聞くとクラス中が安堵の声に包まれる。

「彼女のことも色々と助けてあげてください」

「麗加もやっと戻ってくるんだ～！」

「楽しみだね！」

千風と美兎が嬉しそうに交わした。

喜びを感じていたのはその二人だけではなかった。

そこには嬉しそうに微笑む勇也の姿もあったのだ。

～05～

あっという間に一日が過ぎ、放課後となった。

教室内は帰り支度をする生徒や部活の準備をしている生徒で慌しい。

豪が鞄に荷物を詰めていると、そこへコソコソとやってきたのは千風と美兎だ。

「丹波君っ！」

声をかけたのは千風だった。

少し頬を赤く染めながら照れくさそうに笑みを浮かべている。

「麗加のいとこなんだってね！私麗加の友達の千風、こっちは美兎。よろしくね！」

美兎は緊張した面持ちでペコッと頭を下げた。

「よろしく！」

豪は微笑みながら返事を返した。

「あのさ、ここのトコずっと麗加と連絡取れなくて心配してたんだけど、元気してた？」

麗加の死から再生までの間のことだろう。

「あぁ・・・」

豪はふと昨日の麗加の言った事を思い出す。

『私ハモウ・・・人間デハナイ』

情も持たずただそう言う姿。

豪が黙ってしまったので疑問の目を送り、美兎と顔を見合わせる千風。

ハッとした豪は再び笑みを浮かべた。

「元気にしている。そう言えば、Ｅ－ｎｏｔｅが壊れたと言って新しいのを最近用意してもらっていたからそれでだと思う」

豪はアドリブでそう答えた。

「そっか、ならまたメールするって伝えて」

「伝えておく。じゃぁまた明日！」

そう言うと豪は荷物を持ち、二人の前を去った。

千風は去り行く豪の姿をその場で見えなくなるまで目で追う。

その目はとても輝く乙女の眼差しであった。

豪が廊下を歩いているとロッカーで部活の用意をしている勇也が気づき声をかけてきた。

「丹波！」

「おう」

豪の前に勇也が駆け寄る。

「そういや名前まだだったよな。俺、邦鷹勇也」

その名を聞いて豪は「そうか、こいつが・・・」と思った。

顔を見たことはなかったが、かつて仁の患者であり麗加の大切な存在であることは知っていた。

真っ直ぐに帰るであろう豪に勇也が訊ねる。

「丹波は部活入る予定あんの？」

「いや、特に決めてはいないんだが」

勇也は手に下げていたスパイクを何気なく肩にかける。

「そっか、俺サッカー部なんだ」

そう言って素直な笑顔を浮かべる勇也に対して豪は好感を持った。

その笑顔を見ると麗加の守りたいという気持ちも一瞬で理解できる。

「足はもう良いのか？」

「え？」

唐突に聞かれ、なぜその事を知っているのかと言う顔をして勇也が驚く。

豪はすぐにその謎を解いた。

「今世話になってるのは田神総合病院の仁なんだ。邦鷹のことは編入する前に少しだけ聞いていたから」

そう聞くと勇也の表情がパッと晴れた。

「マジ！？そうなんだ！！仁先生元気か？」

勇也のテンションが一気に上がった。

が、すぐにそれも下がり苦笑を浮かべる。

「あ、でも・・・俺、病院では結構カッコ悪い事ばっかりでさ。情けなかったな・・・」

勇也は目線を落としながら体を横に向け、都合悪そうに言う。

「ははは、病院とはそういう所だ」

豪に言われ勇也は再び正面を向くと「そうだな」と言って笑みを浮かべた。

不意に勇也の様子が変わる。
何か言いたげにソワソワとした様子を見せる。
意を決したようにすると、豪に一歩近づき小声で囁いた。
「暮内・・・何か言ってた？」
病院で一時一緒だった麗加。
麗加の前では明るく接したつもりだったが、情けない姿を見られていなかったかとずっと気になっていたのだ。
勇也の恥を忍んでいる姿に豪は気を使う。
「何も。元気になったと知って安心していた」
「そっか」
そう聞いて勇也は少し安心した様子を見せた。
その時の表情に豪は何か感じるものがあった。
それを豪は微笑ましく思うのだった。
「やべっ！部活行かないと！！！」
時計を見て我に返る勇也が慌て出した。
「悪いな呼び止めて、また明日な！！！」

「いや、またな！」

勇也は笑顔でその場を去っていった。

～06～

豪は校外に出ると、人目を避けながら移動し、誰もいない事を確認するとｓｋｙｓｙｓｔｅｍを作動させ帰路に着く。

「おかえり」

帰った豪を出迎えたのは仁だ。

「あぁ」

豪は一言だけ返した。

学校で見せた面影はすっかりなく、いつもの冷酷な目に戻っていた。

「どうだった？スクールライフは」

「フン！遊びに行ったわけではない」

冷たく放つ豪に仁は苦笑を浮かべた。

「そうだな・・・すまない」

「あいつは？」

仁の様子にお構い無しに豪が訊ねる。

「あぁ。異常反応は出ないし、身体的には問題はなさそうだから復学しても大丈夫だけど・・・」

どこか自信なさげに仁が答える。

「やはり、麗加の「心」そのものはインストール出来なかった」

その深刻な様子から麗加の人間性の欠落を思い知らされるのだった。

「あれはもはや「暮内麗加」とは違う。「暮内麗加」のデータをインストールされたサイボーグだ。あいつは俺に言った。「私ハモウ、人間デハナイ」とな」

仁は言葉に詰まり、黙ってしまう。

「だが、あいつを「暮内麗加」にするしかない。このままあの死を無駄にはしたくない。「麗加」の情報はまだ生きているからな」

日も落ち、オレンジ色の光が差し込む廊下に豪の姿があった。

訪れたのは麗加の部屋の扉の前。

コンコン！とテンポの速いノックを鳴らし豪は戸に手をかける。

「入るぞ」

少し間を置いたが返事がないのでそのまま戸を開けた。

部屋の中は夕日の差し込むわずかな光のみで薄暗かった。

ベッドに腰掛け、ただ一点をボーっと見つめじっとしてる麗加・・・の姿があった。

少しして豪の気配に麗加が反応をする。

ハッと振り返るというより、静止中だったコンピュータが再び起動したような仕草だった。

それは麗加の姿をしたＣ－Ｍ２Ｘ型サイボーグでしかない。

Ｃ－Ｍ２Ｘ型が豪の方を振り向くと一言発する。

「豪。おかえりなさい」

その一言に豪は昨日の話し方とは随分の違いを感じた。

機械的さは消え、自然なイントネーションをしていたのだ。

「話し方は少しはマシになったか」

「真純さんに、教えてもらった」

少し学習していたＣ－Ｍ２Ｘ型であったが、相変わらず表情のないそれは、まだまだ人間性には欠けているのだった。

豪はフッとため息をついた。

「真純も指導がまだまだだ。とりあえず部屋が暗くなったら明かりを点ける。人間にはまだ程遠いな」

そう言って豪は部屋の明かりを点けた。

一気にパッと明るくなると、Ｃ－Ｍ２Ｘ型はその光に反応し天井の電灯を見上げる。

「お前、友人のことは覚えているか？」

豪が尋ねた。

「友人・・・？」

Ｃ－Ｍ２Ｘ型は視線を豪の方へ落とし、記憶のデータの検索を始めた。

それはほんの数秒で結果を出し再びＣ－Ｍ２Ｘ型が口を開いた。

「「私」には二人の親友がいる。千風、背が高くファッションセンスがあり、ダンスが得意でかっこいい女の子。美兎、小柄で色が白く、優しくて可愛らしい女の子。二人とも大切な存在」

Ｃ－Ｍ２Ｘ型の中にはそんな二人の情報が記憶されていた。

～07～

豪が少し間を置いて再び尋ねる。

「では、邦鷹勇也の事は覚えているか？」

Ｃ－Ｍ２Ｘ型はその名を聞き再び検索をする。

先ほどより少し時間がかかっていた。

沢山の情報があるのだろう。

しばらくするとＣ－Ｍ２Ｘ型の口が開く。

「邦鷹勇也・・・勇也君、カッコいい、優しい笑顔、綺麗な瞳、ドキドキする、側にいたい、会いたい、切ない、不安、助けたい、恥ずかしい、「私」の大好きな人・・・まだまだ沢山出てくる」

千風や美兎の時とは違い、溢れ出てくる感情と感覚にＣ－Ｍ２Ｘ型は少し混乱を覚えた。

麗加は勇也に恋をしていた。

その情報がＣ－Ｍ２Ｘ型には沢山詰まっている。

情報はあり、感情も理解出来るのだが、人間が感じる胸のドキドキやキュンと痛む感覚が分からない。

Ｃ－Ｍ２Ｘ型はしばらく黙り込んだ。

パソコンがデータを開く為のプログラムを検出しているかのように。
そしてそれは終結を迎える。
「邦鷹勇也に対する情報の解読不可能・・・感情表現に対する適切なプログラムがない」
頭の中の情報、感情と体の感覚がどうしても結びつかなかった。
例えば、ドキドキする、恥ずかしい、好き、と言う感情と共に本来なら心臓の鼓動が増す。
人間なら当たり前の事だが、Ｃ－Ｍ２Ｘ型にはそこが欠落していた。
表情が作れないのもそのせいだった。
勇也に関する情報に対しては特に表現が出来ない。
そして自身を人間だと思っていないのも大きい。
豪はＣ－Ｍ２Ｘ型に歩み寄る。
「混乱させて悪かった。お前にはそう、「心」がない。だが、心はプログラム出来るものでもない。自身が経験をし、身に付けるものだ」
Ｃ－Ｍ２Ｘ型は黙ったまま豪の目を見て聞いている。
「お前の中には麗加の情報がある。それを元にお前は「暮内麗加」

になるんだ。「人間」になるんだ。少しずつでいい」

「「私」は「暮内麗加」。「私」は「人間」・・・」

豪はそれ以上話すのを止めた。

「明日も真純に色々と教わると良い。友人らが「麗加」を待っている」

そう言うと豪は部屋を後にする。

部屋に一人になったＣ－Ｍ２Ｘ型は溢れる麗加の気持ちの情報を整理し、言葉にする。

「もし、「私」が死んで蘇った時、「私」はもう人間ではないだろう。人間ではない「私」は、勇也君を守る資格があるのか。勇也君を好きでいられるのか。それは本当の「私」なのか・・・」

Ｃ－Ｍ２Ｘ型はまだ理解しきれない麗加の「心」をただ機能的に言葉にするしか出来なかった。

～08～

パタン！

隣の部屋のドアの閉まる音がした。

その音でＣ－Ｍ２Ｘ型はフッと目を覚ます。

とは言っても体制はベッドに座ったままで、またもその仕草は静止中から復帰したコンピュータのように。

Ｃ－Ｍ２Ｘ型は一睡もすることなく自分の中の情報をずっと処理していた。

いつしか夜は明けており、白く眩しい日差しが差し込んでいる。

Ｃ－Ｍ２Ｘ型は立ち上がり部屋のドアを開け廊下に出た。

見るとそこには豪が制服を着て歩いていく後姿があった。

学校へ行くのだろう。

「豪・・・」

Ｃ－Ｍ２Ｘ型は声をかけた。

その声に気づいた豪が立ち止まり振り返る。

どうした？と言わんばかりの視線をＣ－Ｍ２Ｘ型に向けた。

「いってらっしゃい」

そこに立つＣ－Ｍ２Ｘ型がそう言って豪を見送る。

人が出かけるときにかける言葉も知っていた。

それをわざわざ行動に移している。

豪から見ると、いや、誰が見てもそこに立っているのは麗加にしか見えない。

しかし、それもＣ－Ｍ２Ｘ型が「人間」を意識しているからこその結果である。

豪は成長を目の当たりにし一瞬笑みを見せた。

「あぁ、行ってくる」

クールに豪が答え、再び歩き出した。

Ｃ－Ｍ２Ｘ型はその足で仁らの元へと向かう。

部屋に入るとそこには書類をまとめている真純がいる。

「おはよう、早いのね」

Ｃ－Ｍ２Ｘ型の姿に気づいた真純が声をかける。
真純の元へ歩み寄ったＣ－Ｍ２Ｘ型は「おはよう」と声をかけた。
仁と賢の姿がまだそこにはなかった為、Ｃ－Ｍ２Ｘ型は見渡している。
「先生達ならまだよ？」
真純にそう言われたＣ－Ｍ２Ｘ型は再び真純に視線を戻した。
「どうかしたの？」
Ｃ－Ｍ２Ｘ型の様子が気になり真純が尋ねる。
「真純さんには分かる？私にはどうしても分からない。どう処理して良いか分からない。これは何？」
Ｃ－Ｍ２Ｘ型の言うことが良く理解できない真純は詳しく聞く。
Ｃ－Ｍ２Ｘ型は一晩中麗加の持つ様々な情報を整理していた。
情報は大方まとまったのだが、どうしても勇也に対する情報だけが解読できなかった。
「恋愛感情」だ。
他の人間に対しては無い、勇也だけに対する特別な感情。
故に基本的なプログラムでは処理が出来ず固まっていたのだ。

「これは「心」がないと分からないもの。豪がそう言っていた。私には「心」がない。「心」とは何？」

そう言うＣ－Ｍ２Ｘ型の姿に真純はＣ－Ｍ２Ｘ型が完成し、起動した日の事を思い出した。

表情を持たず、機械的に言葉を発するＣ－Ｍ２Ｘ型に感情が無いと感じたあの日の姿。

それがほんの数日でここまで成長している。

「心とは何か」それを想う時点で「心」の芽生えであると真純は感じた。

真純は優しい笑みを浮かべる。

「一言で「心」とは何かを説明するのは難しいことね。「心」と言う物はとても抽象的で目には見えないもの。私達人間にすらその実態は分からないの。哲学的な説明をするより、貴女自身が感じるものがあると思う。それが「心」よ」

Ｃ－Ｍ２Ｘ型は少し考えている。

「感じるもの・・・」

「今貴女は「心」が分からなくてどんな気持ち？」

そう言われるとＣ－Ｍ２Ｘ型は再び考える。

「気持ち」と言われてもそれをどう処理すればいいのかを悩む。

少ししてＣ－Ｍ２Ｘ型が結論を出す。

「「暮内麗加」の情報には「心が分からない」と言う気持ちの情報がない」

あくまでＣ－Ｍ２Ｘ型は麗加の情報しか持たない為、情報に頼るしかない。

真純は質問を少し変えてみる。

「じゃぁ、その情報から想像してみて。もうすぐ貴女は復学して友達に会える。どんな気持ちがある？」

Ｃ－Ｍ２Ｘ型は情報を検索する。

「嬉しい・・・楽しみ・・・早く皆に会いたい・・・」

ヒットした情報を一つ一つ言葉にする。

「そうね。それはね、大きく分けて「喜怒哀楽」というものの「喜」の感情なの。「喜」を感じると人は笑顔になって、ワクワクしたりするでしょ？」

Ｃ－Ｍ２Ｘ型はキョトンとした目で真純を見ている。

「分からないのよね・・・ごめんなさい」

真純が少し不安そうな表情をして謝った。

～09～

その時Ｃ－Ｍ２Ｘ型の様子に少し変化があったことに真純が気づく。

「分からない・・・」

ふとＣ－Ｍ２Ｘ型が呟いた。

うつむき、眉をひそめて、寂しそうな、不安そうな、そんな表情をした様に見えた。

それを真純は見逃さなかった。

Ｃ－Ｍ２Ｘ型は確実に心を持っていると確信した。

今まさに、Ｃ－Ｍ２Ｘ型は「分からない」と感じているのだ。

「今貴女が感じたその「分からない」と言う気持ち。それが「哀」よ。悲しい、辛い、不安。そう感じて貴女は寂しそうな表情をした」

「これが「分からない」と言うこと・・・「分からない」気持ち・・・」

Ｃ－Ｍ２Ｘ型は無くした心を取り戻しているかのようにその気持ちをかみ締めている。

そして目を閉じ、自分自身が感じることの出来た感情をその脳裏に記憶しているようだ。

「貴女にはちゃんと「心」はあるわ。まだ生まれたばかりだから分からないだけ。人間と同じよ」

しばらくその様子を見守っていた真純はＣ－Ｍ２Ｘ型の異変に気づく。

Ｃ－Ｍ２Ｘ型は一睡もしなかった為そのまま休止状態へと入ってしまったのだ。

コンピュータと同じように長時間の稼動は負担になる為、人間で言う「睡眠」は必要なのである。

真純はそのままＣ－Ｍ２Ｘ型を寝かせておき、書類の整理の続きを始めた。

「おはよ～」

両腕を大きく伸ばし大あくびをしながら現れたのは賢だ。

「おはよう賢さん。大きなあくびなんかして夜更かしでもしたのかしら？」

目に涙を溜め寝ぼけた顔の賢に真純がくすっと笑う。

「ん～～、Ａ－Ｄ２Ｘ型の事でね～」

忘れてはならない存在だ。

真純の顔が少し強張った。

賢はあれからＡ－Ｄ２Ｘ型のデータの参照や解読を続けいている。
外観特徴はもちろん、どのようなプログラムやスペックを持っているのか完成品の詳しい情報は上層の一部の人間しか知る者がいなかった。
その人間達も今や生存しているのかも不明だ。
製造した自分の父親もおそらくもう生存はしていないだろう。
手がかりはこの残されたデータのみなのだ。
少しの間の後、真純はそっと「お疲れ様・・・」と賢に声をかけた。
思っても見ない所で眠るＣ－Ｍ２Ｘ型の姿に気づいた賢は唖然とした。
「何でこんなところで寝てるんだ？この子は」
その姿に真純は再びクスクスと笑う。
「彼女も夜更かししたみたい」
「休止がうまく動かなかったのかな？」
プログラムのエラーでも出たのかと心配する賢。
真純は手を止めＣ－Ｍ２Ｘ型を調べようとする賢の元へ寄る。

「賢さん、彼女は・・・「心」を持ってるわ」

「え・・・？」

賢は信じられないと言った顔をして真純を見た。

「彼女は、さっき「哀」の感情を表したの」

「・・・科学的に実体の無い人間の心を作るのは不可能だ。Ｃ－Ｍ２Ｘ型には豪のように脳をそのまま移植させてはいない。あくまでデータ化した情報しかない。プログラム的に感情を表せても自我を持つことは出来ない」

「理論上は・・ね」

真純がすかさず否定するように言う。

そして続けた。

「Ａ－Ｄ２Ｘ型だって自我の目覚めで行動を起こしている一説があるのでしょう？この子にも考えられるはずよ。医学で解明できないこともあるように科学で解明できないこともあるのよ」

二人は眠り続けるＣ－Ｍ２Ｘ型を見つめた。

賢が腰に手を置きフッとため息を一つつく。

「とりあえず、起動してから少し日数も経つし一度メンテも必要かな・・・」

あくまで機械として扱うような言い方に真純は少し切なさを感じる。

この間まで生きていた普通の女の子だったのに、見た目だって変わっていないどこから見ても誰が見ても一人の女の子。

真純は複雑な気持ちを抱えた。

～10～

「丹～波くんっ！！」

今朝のＣ－Ｍ２Ｘ型の様子を思い出していたのか、頬杖を付き自分の席でぼーっと過ごす豪に朝からテンションの高い声が届く。

声のする方を振り向くと登校したばかりの千風とその後ろに美兎が立っていた。

「おはよー！」

千風が額の横に大きく開いた手の平をひらひらさせながらにっこり微笑んでいる。

後ろにいた美兎も千風に続き、控えめにペコッとお辞儀をしながら「おはよー」と言った。

「おはよう」

豪は快く笑顔で返した。

不意に千風が豪の前の席の椅子を引き、豪の方を向いて座る。

「ね！ね！麗加が戻ってきたらさ、今度皆で遊び行かない？丹波君の編入と麗加の復帰祝い兼ねてさ！」

千風は目をキラキラとさせながら期待の眼差しを送っている。

彼女は恋煩いに悩むタイプではなく実に積極的である。
「そうだな、この街の事もまだ知らないことが多いし、是非お願いするよ」
豪は断る理由もなく、千風の誘いを受けた。
「やったぁ！」
千風は子供のように無邪気にはしゃいで大きくバンザイをした。
そんな素振りもつかの間、急変して真顔になると口の横に手を当て豪に耳打ちするような仕草をする。
「そこでお願いなんだけど、邦鷹も誘ってくれないかな～？」
そう言うと両手のひらを合わせお願い！と一言添えた。
豪はもちろん理由を察し「オーケー」と即答した。
そう話していると丁度廊下にに勇也の姿が見えた。
親友の星夜と楽しそうに話しながら教室の入り口を入る。
千風と美兎は「よろしくね！」と言い足早にその場を去った。
豪の隣の席に勇也が着く。
「丹波、おはよ！」

勇也が笑顔で挨拶をした。

一緒にいた星夜も「うっす！」と白い歯を見せて声をかけて来た。

黒くウルフスタイルの髪はワックスでスタイリングされており、腰から下がるウォレットチェーンや太目のリングはシルバー系のアクセで統一されている。

人懐っこく元気だけが取り柄と言わんばかりの明るい青年だ。

「おはよう」

豪は二人に返す。

席に着いた勇也に豪は早速誘いを入れた。

「暮内が復帰したら、オレの編入とあいつの復帰祝い兼ねて遊びにと誘われたんだけど、一緒に行かないか？」

勇也は楽しそうな表情を浮かべ「いいね！行こう！！」と嬉しそうに言った。

その時離れた席に着いた星夜がその様子を聞きつけ足早に二人の下へ戻ってきた。

「はいはいっ！！その話オレも参加していいっ？？」

挙手しながら星夜は乗り込んできた。

「暮内ってことは、美兎も一緒だろ？？行く行く！！オレも行くー

ー！！！」

そんな星夜の様子を見て豪と勇也は思わず笑う。

「お前、分かりやす過ぎだよ」

勇也が星夜の肩に手を置いて言った。

「何だ、あの子とは付き合ってるのか？」

豪が尋ねると星夜の頬が一気に赤くなる。

「や、そ・・・そんなんじゃ、ねーけど・・・さ。あいつとはただの幼馴染っつか・・・」

明らかに美兎の事が好きだと言う反応だ。

「残念だが、星夜を誘えと言う依頼は受けていないんだ。すまないな」

豪がちょっと意地悪そうに星夜に言うと勇也が堪え切れずに笑い出す。

「えーー！！えーー！！だってよ！！向こうも3人だろ？？で！こっちも3人！！！はい！トリプルデート！！それで良いだろ～～！！！？」

必死になる星夜の姿に勇也と豪は声を出して笑った。

まだ成立していないこの相関図・・・この先どう展開を見せるのだ

ろう。

ポーン・・ポーン・・・

そんなやり取りで盛り上がっていると、授業開始前のチャイム音が鳴る。

「もうっ！！絶対だからな！！！！」

星夜は最後にもう一度釘を刺し自分の席へと戻っていった。

「朝からうるさい奴でごめんな。悪い奴じゃないんだけど」

「あぁ、分かってるさ」

豪に親友のフォローをする勇也に豪が笑顔で返す。

久々に穏やかな時間を過ごしている事に豪は気づく。

高校生と言うのが例えもう仮の姿だとしても、クラスメイトと仲良くする豪の心に偽りはなかった。

「そう言えば、今日の1限目は須吾先生の世界史だな。すっげ面白いんだよ」

「ほお、邦鷹のお墨付きとは、それは楽しみだな」

～11～

朝会も通常通り終えると、1限目の始まるチャイムが鳴る。

鳴り終える頃教室の戸が開き、一人の男性が姿を現した。

彼の登場に待っていましたと言わんばかりに女生徒からは黄色い声が上がる。

「センセー！今日も良い男だねー！」

毎回お決まりの台詞がかけられると、彼はニッコリと笑顔で返すのだ。

彼が教壇に立つと号令がかかる。

「起立！礼！」

「皆おはよう！」

彼が元気良く生徒達に挨拶をした。

生徒達を見渡す彼の目がある一人の男子生徒に止まる。

見慣れないその顔をじっと見ている。

一瞬その表情は良くも悪くもない本人にしか分からない複雑さを持ったようだが、感付かれない程であった。

すぐに笑顔を向けたのは豪だった。

「君が編入生の丹波君だね。世界史の須吾です。よろしく！」

とても優しい笑みを向ける須吾に豪も一言返す。

「授業楽しみにしています」

そう言われると須吾はニッコリと嬉しそうに「ありがとう」と答えた。

その頃、田神総合病院の隠れた一室で賢はモニターの画面をじっと見つめていた。

Ｃ－Ｍ２Ｘ型が休止モードに入っている間に初めてのメンテナンスを行っている。

参照していたのはＣ－Ｍ２Ｘ型起動から今回休止するまでの間に起動したプログラムの一覧だった。

スクロールする画面があるところで止まる。

「やっぱりな」

賢は思った通りだと不具合を見つけた。

キーボードを素早く叩くと不具合を修正したようだ。

「これで良し！」

そう言うともう一度画面を確認し、うんうんと頷くと一旦その場を離れ仁の元へ移動した。

今は病院の方に出ている為そこには真純の姿はない。

「兄さん、やっぱり一つ上手く起動してないプログラムがあったよ。今その修正をかけた。休止の時間もズレが出ちゃってるから一度再起動して修正をかけるよ」

「そうか。ところで、起動していなかったプログラムってのは何なんだ？」

「うん、感情表出プログラムなんだけど、問題なく起動していれば以前の麗加のＡＩで自然な仕草、反応が出来る。これが起動してなかったからＣ－Ｍ２Ｘ型がわざわざ麗加のＡＩを検索してた。情を感じなかったのもそのせいだ。まぁ、感情を感じるかどうかってのもプログラムで錯覚させるだけなんだけど」

そう説明すると仁は複雑な表情をしたが、他に異常がないのなら良かったと再起動を了解する。

その前に、賢は今朝真純から言われた一言が気になっており仁にも話すことにした。

「真純ちゃんがさ、Ｃ－Ｍ２Ｘ型には感情があるって言うんだけど、

兄さんはそう言うの何か感じた？」

心なしか深刻そうな顔をする賢に、何か重大なことでもあるのかと仁も真剣に考える。

「どちらかと言うと、感情があるとはとても思えないな。表情一つ変えずに機械的にしか話さなかった。寂しいなと思う程だ」

求めたかった回答が戻ってきたので賢は少しホッとする。

やはり真純が感じたと言う感情も、上手く起動していなかった感情表出プログラムがＡＩの検索過程で一部起動した事により見せたのだろう。

「そっか、なら良いんだ」

しかしどこか不安は隠せない。

そんな賢の様子を仁は見逃さない。

「もし・・・彼女の言ってることが正しかった場合、何が起こる？」

仁の問いに賢は動揺する。

「そんなこと、考えたくもないな。もし、そうなったら・・・人類の文明は終わる」

二人の間に沈黙が走った。

賢は再びメンテナンスを行っていたパソコンの前へと移動する。

「でも、やっぱりそれは不可能なんだ。だから起こりえない」

そう言うと賢はＣ－Ｍ２Ｘ型を再起動させた。

～12～

キューーーーン！

Ｃ－Ｍ２Ｘ型がゆっくりと目を開けた。

「おはよう」

仁が声をかけ、賢も寄る。

目の前にいる二人を不思議な様子で見た後、自分が目覚めたその部屋を見渡している。

「おはようございます・・・私なんでこんな所で寝てたんですか？」

そう言って驚く表情を見せた姿は今までのＣ－Ｍ２Ｘ型とは明らかに違った。

それは生前の麗加とほぼ同じと思える反応だ。

二人は本来の正常な姿で起動した「麗加」に安堵の表情で微笑みかけた。

「少しメンテナンスをしたよ。楽になっただろう？」

優しく語り掛ける賢だったが、とても人間に言うような台詞ではない。

「メンテ・・・？あ、そっか・・・」

麗加は何故メンテナンスを？と疑問を抱いた直後に自ら解決して苦笑した様子を見せた。

その表情からは複雑な心理だったのだろうと感じる。

そうプログラムによって自然に錯覚させたのだ。

賢はこれなら大丈夫だろうと納得した様子だ。

「明日一日様子を見て、問題なければ復学しても大丈夫だろう」

そう聞いた麗加は嬉しそうに笑みを浮かべた。

「もう行ってもいいですか？学校の準備もしたいので」

太陽のような明るい笑顔で問いかけてきた。

よっぽど嬉しいのだろう。

仁と賢は顔を見合わせると、賢がコクリと頷きそのＯＫの合図に仁が口を開く。

「少しでも何か感じたら直ぐに言って。あと、準備に足りないものとかも遠慮なく」

「はい！ありがとうございます！」

麗加は小走りでその場を後にした。

麗加の姿が見えなくなると、部屋の空気は一変する。
先程まで太陽の眼差しで明るかったのが嘘のようにそれは深まる闇のようだ。
「兄さん・・・彼女、麗加には、やっぱり戦わせてはいけない」
何かに怯えているような、重大な事に気づいたような賢の突然の発言に、仁は今ひとつ理解に苦しんだ。
「・・・俺には全部話せ」
仁が静かに告げると、しばらくの沈黙の後賢は辺りを見渡し他に誰の気配もない事を確認すると重い口を開いた。
「あのプログラムは、元々父さんが開発したものなんだ。だが、実用化には至っていなかった・・・いや、実用化してはいけなかったんだ。人間の思考を持つがクローンとは全く違う。サイボーグ化することで人間には不可能な能力を持ち、ＡＩで自らの意思で行動する。豪とも、Ａ－Ｄ２Ｘ型とも違う。彼女こそ・・・完全体の、サイボーグなんだ」
人間をサイボーグ化することは違法であることは知っているが、麗加は人間の能力をそのまま持ち合わせ作られたサイボーグであり、異例の存在なのである。
人間の脳にある記憶などをデータに起こす技術もまだ世間には公表されてはいない。
開発者である父、田神スンさえもそれは法を犯すよりも恐ろしく、

科学のタブーだとしていた。

この事は研究に携わった賢しか知らない。

しかし、賢はこの技術がこれからの時代必ず必要になり役に立つと思っており、こっそりプログラムを所有していたのだ。

父の死を確信した今、父の技術を無駄にしないためにも活かす時だと、麗加の死の瞬間に決心したのだが・・・。

その時はまだ、父が恐ろしがっていた意味が分かっていなかった。

しかし、実際に完全体を目の当たりにして初めて理解した。

それは人類の終わりをも意味する程に大きい。

賢は一瞬で全てを悟っていたのだ。

「しかし・・・ＡＩはあくまでプログラムに過ぎない。確かに、サイボーグ化を望んだのは彼女の意思だが、でもあの子は普通の女の子だ。守りたい人がいた。それ以前に、やはり生きたかっただけだろう？」

仁がそう言ったまさにその頃、部屋に戻った麗加は復学の為の準備に勤しんでいた。

壁にかけられた制服を眺め、親友達との再会を想像し笑みを浮かべる姿は普通の女の子だ。

「賢・・・」

黙り通す賢に声をかける。

「そうだよ。彼女は普通の女の子だ。だから、彼女に戦わせては駄目なんだ。豪も。・・・Ａ－Ｄ２Ｘ型は存在させてはいけなかったんだ。僕等は造ってはいけない時代を造ってしまった。まだ間に合うかもしれない・・・手遅れにならないうちに何としてでも、Ａ－Ｄ２Ｘ型は・・・僕の手で止めなければ・・・そして、彼女と豪の戦闘能力を省かなければ。せめて違法の存在ではなくして普通に暮らせれる様に」

その言葉には自分の命をかけているであろう意思が込められているように思える。

全て一人で・・・続けてそう言おうとする賢より先に言葉を発したのは仁だった。

「全く。変わってないな。お前はいつもそうだ。全て一人で抱え込もうとする。言っただろう？俺も力になると。お前・・・ずっとＡ－Ｄ２Ｘ型の手がかりを探っていてまともに眠ってないだろう。俺や真純ちゃんに迷惑をかけないようにな。そんなんではＡ－Ｄ２Ｘ型どころか、自分が先に身を滅ぼすぞ」

図星を突かれた賢は、少し肩の荷が下りたように強張った顔が緩んだ。

「ありがとう兄さん・・・少し考えすぎていたのかもしれない」

仁は賢の肩にそっと触れる。

「あぁ、疲れて判断力も鈍っているだろうし、少し休め。そして冷静に考えて行動に移していこう。俺に出来る事は何でも良い。言ってくれ」

賢はその後しばしの休息についた。

「丹波君！」

放課後、帰宅しようと廊下を歩く豪を呼び止める声がした。

「あっ」

振り返るとそこにいたのは須吾だった。

「帰るのかい？」

「あぁ・・・はい」

須吾はニコッと笑う。

「そうか、気をつけて！またな！」

「はい、さようなら」

豪は一度軽く会釈をし、その場を去って行く。

その姿を見届けた須吾が呟いた。

「ブラフマーは・・・彼か」

その意味深な言葉を他に耳にするものはまだいなかった。

～13～

豪が帰宅するとそのまま部屋へと向かう。

角へ差し掛かったその時・・・

ドン！！

「あっ！」

「うっ！」

ほぼ同時に発した声と衝撃に驚き、出会い頭にぶつかった二人・・・はお互いを見合わせる。

ぶつかった反動で床に座り込みこちらを見ていたのはＣ－Ｍ２Ｘ型・・・？

しかしその疑惑は次の瞬間にかき消されることとなる。

「あ、おかえりなさい！」

痛がる様子は一切見せずに満面の笑みを向けている。

今までとは人が違う様に豪は目を点にしていた。

そんな豪を不思議そうに見ているＣ－Ｍ２Ｘ型・・・麗加は続けて声をかける。

「どうかしたの？」

「いや・・・どこも壊れてないか？一応・・・見て貰った方が・・・」

そう言って豪は麗加に手を差し伸べる。

その言葉に先程までの笑みは一瞬で曇り、ムッとする麗加。

「失礼ね！人をロボット・・・・」

麗加は自分で立ち上がりながら言いかけたが、またも「あっ」と気づいたように発言を止めた。

そしてまた笑顔を見せるが先程とは違い少し曇った笑顔だった。

「うん、大丈夫。ありがとう」

「・・・いや」

豪が未だに状況が飲み込めないでいると、麗加は豪の姿を改めて確認しパッと笑顔を見せる。

「その制服・・・そっか、学校行ってるんだ！」

ちょっぴり羨ましそうに制服を眺めている。

「あぁ、お前と同じクラスだ」

「そっか！皆・・・元気にしてる？」

皆と言ってもそれは特定の人物に限られていることは直ぐに分かる。

「邦鷹なら元気だ。仲良くやってる」

麗加はそんなつもりで聞いてないと恥ずかしそうな顔をし、あわてて話題を変える。

「ち、千風と美兎だよ！！」

豪はクスッと笑った。

「あぁ、皆お前のことを待っている。そうだ、連絡を欲しがっていた」

「いけない、私全然連絡出来なかったから・・・ありがとう！早速連絡しておく！」

麗加は再び笑みを浮かべ、部屋へ向かい駆けていった。

豪も部屋へ向かい荷物を置いて着替えを済ませると賢の元へ向かう。

部屋へ入るとそこにいたのは仁だった。

「帰ってたのか。おかえり」

「賢はどうした？」

部屋の中を見渡したが賢の姿がない。

「根詰めて疲れていたから休んでいるよ」

「フン！」

豪は呆れ顔で冷たく放つ。

「それより、あれはどういう心境の変化だ？」

麗加の変貌振りを説明しろと豪が問う。

「あぁ、本来ならあの姿で起動するのが正常なんだ。今日メンテナンスをしてね。感情表出プログラムってやつが起動してなかった不具合があったらしい。だから人間らしさが欠けてしまっていたんだ」

豪はそれを聞いて大方納得がついた。

しかし、メンテナンスをしたのが学校へ行っている間だと気づくと、少し違和感を覚えた。

感情表出が十分に出来ない状態でも、時折感情らしきものが垣間見えた瞬間があったからだ。

それは特に今朝の様子にあった。

『いってらっしゃい』

あの時の行動の意思は感情によるものではなかったのだろうか。

人間らしさを感じたのは気のせいだったのだろうか。
プログラムが起動していない状態で錯覚させられていたのだとしたら・・・。
そんな事を考えているとも知れず、仁は続ける。
「これで何も問題がなければ麗加も復学させられる。情けない話だが、Ａ－Ｄ２Ｘ型の事はまだ有力な手がかりがない。これから益々君達の力が必要になると思う・・・悪いが」
「悪いが！！」
同じ言葉で豪は仁の口を止めた。
「俺は頼まれるつもりはない。これは俺の意思だ。必要があればこっちからアンタ等を利用する。勘違いするな」
「・・・うん」
仁が言葉に困っていると、豪は部屋の中を移動し役に立ちそうにもない書類を手に取る。
「こっちもまだ何もつかめていない。まぁ、あんな学校の中に何かがあるとも思えないがな・・・」
そう言って手に取った書類をパッと投げるように机に置いた。
「さっさと回復して、せいぜいＡ－Ｄ２Ｘ型の外観的特徴だけでも

早く解明するんだな」

そう言い残し豪は部屋を去った。

～14～

長い休学を経て、ようやく麗加が復学する時が来た。

相変わらずの真面目を保った制服の着こなしに、キリッとした面持ちが合っている。

「いってきます！」

麗加と豪は一緒に玄関に立ち、見送る仁に麗加は嬉しそうに振り返って声をかけ二人は外へ出た。

久しぶりの街の朝の光景に懐かしいような気分に少し浸った。

気が付くと豪は既に歩き出していた。

しかしその方向は麗加の思っている学校へとは反対の方角だ。

「ねぇ！」

麗加は慌てて豪を呼び止めた。

方向が違うのではと疑問を投げかる前に豪が答える。

「スカイシステムを使ったほうが早い。こっちだ」

豪は首で方向を示すと再び歩き出す。

「……あのっ！」

少し迷ったような仕草を見せ、麗加は豪をもう一度呼び止めた。

足を止め振り返る豪に麗加は語りかける。

「私…、本当はまだ自分の身に起きた事が理解しきれてないんだ…。もう、人間ではないんだろうけど、でも……それでも人間らしくいたい気持ちもあって。だから、必要ないときは出来るだけ……前みたいにいたい」

こんなことを言ってはダメだろうか？と不安そうに豪を見る。

うまく言えない様子だが、そんな麗加の気持ちを察した豪は「そうか」と一言だけ残し、一人人目のない路地へと入っていった。

麗加は少しホッとすると学校の方角へ歩き出す。

その後方からは猛スピードで上昇し、肉眼では見えない程の高度を飛行する豪があっという間に麗加を追い抜いて行った。

２０分程歩くと学校が見えてくる。

久々の光景に思わず笑みがこぼれた。

門に近づくとそこには見慣れた二人の姿があった。

千風と美兎だ。

「麗加ーー！！！」

麗加の姿に気が付いた千風が大きく手を振って叫んだ。
麗加は小走りで二人の元へ向かった。
三人は再会を心から喜んだ。
久々の顔ぶれに笑が絶えない会話の中、教室へ入ると既に豪は席に座っていて静かに外を眺めている。
「丹波くーん！おっはよー！！」
いつもの事だと言わんばかりに千風が豪に声をかける。
「おはよ」
ニコッとしながら返す豪。
その様子を見た麗加の目が点になる。
そんな麗加の存在に気が付いた豪は気まずそうに顔を背けた。
豪も人間らしい部分は捨てていないのだと知ると、麗加は微笑ましく思った。
朝会の時間が近づくと、朝の部活を終えた勇也が教室へとやってくる。
「麗加！！そろそろ来る頃だよ！！」
千風にそう言われると麗加は落ち着きがなくなる。

教室に入ってきた勇也に気づき、麗加は恥ずかしそうに目を向けた。
麗加の姿に気づいた勇也も反応を示す。
「よう！暮内！！！久しぶりっ！！！！！」
期待とは裏腹にその声は勇也の後ろからヒョイっと姿を現した星夜だった。
誰も求めていない人物だけに静まる女子三人。
「ちょっと！！アンタはいいのっ！！邪魔っ！」
星夜の頭をペンッ！と叩いて注意するのは美兎だ。
「何でだよー！あっっ！！美兎お前……ヤキモチ？！！エヘッ！」
「はぁ？！誰がアンタにヤキモチなんか妬くのよ！！」
そんな二人のやりとりに麗加、千風、勇也の三人は思わず笑う。
気を取られている千風の後ろに回り、麗加の元へ寄る勇也。
「おかえり！元気そうで安心したよ」
そこには大好きな笑顔を向けてくれる勇也がいる。
「ありがとう！」

嬉しさと恥ずかしさと、色々な感情が溢れる。

つかの間の幸せに浸る間もなく、朝会を知らせるチャイムが無情にも鳴り響く。

勇也は自分の席の方へと行ってしまった。

しかし、やっぱりこの時を迎えられて良かったと今は心一杯に感じるのであった。

～15～

「麗加ー！行くよー！！」

放課後を待ちわびていたと千風が麗加を誘っている。

美兎も加わると以前と変わらない”お決まりの場所”へと向かった。

そこはグランドが見渡せる校庭だ。

その中でも目的のサッカー部が良く見える定位置へと来ると、三人はその場に腰を下ろした。

「うほっ！久しぶりだー！」

青空の下、うーーん！と背伸びをする千風。

「麗加がいない間は用なかったもんねー」

美兎も手を組んで腕を前に伸ばした。

「えー、それはどうかなぁ？私は麗加の付き添いだけどさぁ。本当のトコロ…どうなん？星夜とは！」

千風が美兎に真相を突き止める。

「何言ってんのちーちゃん！！アイツはただの幼馴染だってば！！」

美兎はムキになって否定している。

「ムキになるとこ、怪しいよねー！」

ニヤニヤしながら千風は麗加に振った。

「二人お似合いだと思うけどね！」

「ちょ！！麗加まで！！」

怒る美兎に二人はあはは！と笑い声を上げた。

「ちーちゃんこそ！！丹波君にホレたでしょ！！」

美兎が仕返しに千風に振る。

「そうなの！？」

麗加は驚いて問う。

「エへへ…実はドストライクでさー！！一見悪そうに見えてめちゃ優しいし！！そのギャップにもうっ！！」

自分の知らない豪の姿を想像すると思わず笑いがこみ上げてくる。

仁や賢が知ったらどんな顔をするのだろうか…

「家じゃ絶対そんな顔見せないのに…」

麗加が思わず呟いた。

「麗加良いよね～！一緒に住んでんでしょ？まさか！！二人で！！！？」

それは聞いてないよ！？と千風が怖い顔をした。

「まさか！知り合いの人の所にお世話になってるんだよ」

いとこ同士とはいえ……と少し嫉妬している様子の千風だが、千風をなだめるように美兎が麗加に振る。

「麗加は邦鷹だもんねー！！」

そう言われると照れくさそうに俯いて微笑んだ。

「お！噂をすればーー！！」

千風が麗加の手をペンペン！と叩いて知らせる。

その時。

「え……？」

先ほどまで興奮していた千風の様子が急変した。

まるで信じられないものに遭遇したかのようにゾッとした面持ちになっている。

その原因の先に千風は目を向けた。

それは先ほど触れた麗加の手。

驚いてそのまま握り続けている。

「ちーちゃんどうしたの？」

美兎が異様な光景に心配している。

麗加も訳が分からずにキョトンとしていた。

「あ…、いや、ゴメン！麗加の手が……あまりにも冷たくて……ちょっと、ビックリしちゃった」

我に返った千風はパッと手を放す。

「手…？」

麗加は疑問に思い、自分の手を顔の前まで上げると裏と表を交互に見た。

美兎もそんな麗加の手に一瞬触れる。

「わっ…ホントだ！麗加って冷え性だったんだねー！」

千風とは違い、あまり驚いていない美兎がサラッと言った。

「うちのお母さんも冷え性でさー。びっくりするくらい冷たいんだよねー。まるで死人みた……あ」

美兎はNGワードだったという顔をして慌てて口を塞いだ。

家族を失った麗加の前で何て事を言ってしまったんだろうと反省しているようだ。

麗加は、気にしてないと笑って見せる。

「何か…ごめんね！」

変な空気にしてしまった事を詫びた千風は気持ちを切り替えるといつものテンションに戻る。

「ホラ！ホラホラ！愛しの邦鷹ちゃんと見なきゃ！！」

「うん！」

麗加は幸せそうに微笑みながら勇也の姿をずっと見ていた。

日が暮れるのもあっという間で、堪能した三人はそれぞれの帰路に着くことにする。

千風と美兎はＳＤでの通学の為、麗加とは既に別れていた。

「しっかしびっくりしたなぁ～」

ヘルメットを手にしながら千風が言う。

ヘルメットを装着しながら美兎は「何が？」と問う。

「いや、あんなに冷たいなんてさ…」

千風はずっと忘れられなかったのだ。

「ちーちゃん、冷え性とは無縁っぽいもんね。どっから見ても健康元気娘だし！」

アハッと笑って美兎が無邪気に言う。

確かに自分には無縁で、あんなにも驚く程とは思わなかった。

だけど……

そう思い自分の手のひらをじっと見た。

「なんか、まるで本当に…」

千風は一人そう呟くと、その先は言葉に詰まる。

「ちーちゃん帰ろー！」

既に準備を終え、ＳＤを起動させて待っている美兎が叫んだ。

「あ、ゴメン！」

慌ててヘルメットを装着し、ＳＤを起動させると千風と美兎は高度を上げその場を去った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4524o/

cyber girl ～REIKA～

2011年10月10日01時36分発行